子どもたちに聞かせたい創作童話第44集

鹿児島市
鹿児島市教育委員会編
公益財団法人かごしま教育文化振興財団

子どもたちに聞かせたい創作童話第44集
鹿児島市・鹿児島市教育委員会・公益財団法人かごしま教育文化振興財団　編

子どもたちに
聞かせたい創作童話
第４４集

鹿　　児　　島　　市
鹿 児 島 市 教 育 委 員 会　編
公益財団法人かごしま教育文化振興財団

子どもたちに聞かせたい創作童話　第四十四集
鹿児島市・鹿児島市教育委員会・公益財団法人かごしま教育文化振興財団編

刊行のことば

鹿児島市と鹿児島市教育委員会、公益財団法人かごしま教育文化振興財団では、「子どもたちの夢をはぐくみ、美しい心を育てたい」という願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」を募集してまいりました。

四十四回目を迎えた今回は、県内はもとより国内三十八の都道府県から、第一部、第二部合わせて一八七点もの応募がありました。また、年齢でみますと、十代から九十代の方まで幅広い年齢層から、作品をお寄せいただきました。

「子どもたちに聞かせたい創作童話　第44集」では、ご応募いただいた作品の中から、特選、入選に選ばれた八作品をご紹介いたします。身近な日常を描いたものからファンタジーなものを取り扱った作品は、どれも子どもたちの夢をはぐくみたいという思いの込められたものになっております。

この作品集が、保育園や幼稚園、小学校等の教育現場のほか、図書館や公民館等のコミュニティにおいて、本の読み聞かせ等の読書推進活動に活用されますことを期待します。

また、市民の皆様が文芸活動の一環としてこの創作童話集を活用され、今後、未来を担う子どもたちの豊かな感性や優しい心をはぐくむ優れた作品を発表されますことを願っております。

終わりに、全国各地から応募していただいた方々をはじめ、作品を審査してくださいました五名の先生方、さし絵を描いていただいた四名の先生方、そして、この作品集の刊行にあたってご尽力いただきました関係者の方々に心より感謝申し上げます。

令和五年二月

鹿児島市
鹿児島市教育委員会
公益財団法人かごしま教育文化振興財団

目次

刊行のことば……1
「第44回　子どもたちに聞かせたい創作童話」受賞作品……4
第一部　特選　「あめのしずくのブレスレット」……井上まゆみ……5
第一部　入選　「もりのフリーマーケット」……陽桜……17
第一部　入選　「人魚姫の歌」……末永志穂……29
第一部　入選　「おじいさんの　メガネやさん」……伊東希美子……45
第二部　特選　「車の中でピクニック」……山崎幸正……61

第二部　入選　「まごころのともしび」……樋口達也……80
第二部　入選　「青い色の鼻」……渡邊誠二……100
第二部　入選　「ボクのしあわせ」……山口智史……115
総評……131
入賞作品の選評……133
「第44回　子どもたちに聞かせたい創作童話」募集要項……140
応募状況……141

「第44回　子どもたちに聞かせたい創作童話」受賞作品

〈第一部〉保育園児、幼稚園児、小学校低学年を対象にした作品

特選	あめのしずくのブレスレット	井上　まゆみ	愛知県
入選	もりのフリーマーケット	陽桜	大阪府
入選	人魚姫の歌	末永　志穂	山口県
入選	おじいさんの　メガネやさん	伊東　希美子	兵庫県
佳作	チューリップ三姉妹	夏目　知佳	宮崎県
佳作	なおくんのばんそうこう	正岡　知子	大阪府
佳作	すなはまの宇宙人	外薗　淳	鹿児島県
佳作	なきむし迷子のつゆぐもくん	朝谷　悠	兵庫県

〈第二部〉小学校中・高学年を対象にした作品

特選	車の中でピクニック	山崎　幸正	長野県
入選	まごころのともしび	樋口　達也	福岡県
入選	青い色の鼻	渡邊　誠二	福岡県
入選	ボクのしあわせ	山口　智史	大阪府
佳作	特別な夏休み	小林　陽花	秋田県
佳作	るてるてぼうず	あらいず　かのり	東京都
佳作	こなつのおもいで	類沙　いくよ	鹿児島県

第一部

あめのしずくのブレスレット

井上　まゆみ

あめが　しとしと　ふっています。
りりちゃんのかさに　あまつぶが　たたん　たたんと　あたります。
しゃがんで　みずたまりを　のぞいてみると　いっぴきのアリさんが　おぼれていました。
「たいへん！　つかまって」
りりちゃんの　ひとさしゆびに　アリさんは　しがみつきました。
「りりちゃん、ありがとう。おかげで　たすかりました」
「どうして　なまえを　しってるの？」
「むかいあってみれば　わかります」
りりちゃんは　はっとして　むねの　なふだを　おさえました。
「たすけてくれた　おれいに　たからものを　さしあげます」

アリさんが　くれたのは　とうめいなたまが　いくつもついた　ブレスレットでした。
「わあ、きれい！」
「これは　あめのしずくのブレスレットです」
「あめのしずくって　こんなふうに　かたまるんだ」
「わたしが　いっしょうけんめい　ねって　かためて　つくったのです」
りりちゃんは　ブレスレットを　うでに　つけてみました。
「おもったとおり　にあいますねえ」
アリさんは　まんぞくそうに　うなずきました。
ブレスレットは　ひんやりしていて　りりちゃんは　ほっぺにあてたり　くちびるにあててみたりしました。
「きいてください。このブレスレットは　ねがいごとを　なんでも　ひとつだけ　かなえてくれます。でも　ねがいをかなえた　ブレスレットは　もとの　あめのしずくに　もどります」
「えっ。なくなっちゃうなんて　いやだよう」
「ですから　ねがいごとは　よく　かんがえてください」

そういって　アリさんは　どこかへ　いってしまいました。
「なくなっちゃうなら、ねがいごとなんて　しないもん」
そういって　りりちゃんも　たちあがりました。

「わあい　きらきら　ぴかぴか」
おひさまは　かくれているのに　ブレスレットは　ひかって　みえます。
きらっきらっ　ぴかっぴかっ
きらっきらっ　ぴかっぴかっ
うたいながら　うでをふると　ブレスレットが　はずみます。
あめのしずくのたまは　のぞくと　かおが　うつるくらい　つやつやです。
「そうだ　さあちゃんに　みせてあげよう」
おともだちの　さあちゃんのいえに　いくと　さあちゃんは　そとにいました。
なにか　さがしているようです。
「さあちゃん　あのね　これみて」
さあちゃんは　そわそわして　りりちゃんのほうを　みてくれません。

「りりちゃん　さくらんぼのキーホルダー　みなかった？」
「えっ　どうしたの？」
「おとしちゃった　みたいなの」
さくらんぼのキーホルダーは　さあちゃんのカバンに　いつもついています。
とっても　かわいいキーホルダーで　りりちゃんも　いいなあと　おもっていました。
「だいじなものなのに」
なきだしそうな　さあちゃん。
そんな　さあちゃんをみて　りりちゃんは　おねがいをしそうになりました。
でも
（ねがいごとをしたら　ブレスレットが　なくなっちゃう。そのうち　きっと　キーホルダーは　みつかるよね）
そうおもって　そおっと　さあちゃんから　はなれました。

りりちゃんが　あるいていると　おともだちの　だいちくんに　あいました。
だいちくんは　おおきなきを　じっと　みあげています。

「タッキーが　きのうえから　おりられなく　なっちゃったんだ」
タッキーは　だいちくんちの　ねこです。
りりちゃんもタッキーを　だっこしたことが　ありました。
タッキーは　にゃあにゃあと　きのうえで　たすけを　よんでいるようです。
「タッキー！　たすけてやるから　がんばれ」
きのうえの　タッキーにむかって　なんども　おおきなこえで　さけぶ　だいちくん。
そんな　だいちくんをみて　りりちゃんは　おねがいをしそうになりました。
でも
（ねがいごとをしたら　ブレスレットが　なくなっちゃう。そのうち　きっと　タッキーは　じぶんで　おりてくるよね）
そうおもって　そおっと　だいちくんから　はなれました。

いえに　かえっても　おかえりのこえが　ありません。
こんなことは　はじめてです。
ママが　ばたばたと　はしりまわっています。

「ゆうまの　ねつが　さがらないの」
ゆうまは　りりちゃんの　おとうとです。
あかちゃんの　ゆうまのかおは　まっかになって　いきも　くるしそうです。
おかえりをいうことを　わすれてしまうくらい　ママは　ゆうまのことを　しんぱいしていました。
いつも　げんきなママが　なきだしそうな　かおをしています。
「ママ！」
りりちゃんは　ブレスレットのことを　わすれました。
「おねがい　ゆうま　げんきになって！」
りりちゃんが　さけんだとたんに　ぱあんと　ブレスレットが　はじけました。
ブレスレットのたまが　あめのしずくに　もどったのです。
とびちった　あめのしずくは　ゆうまのかおに　ぴしゃぴしゃっと　かかりました。
「あら。ねつが　さがってきたのかしら」
すやすやと　ねいきが　きこえて　ゆうまは　きもちよさような　かおをしています。
「ママ　あんしんして。ゆうまは　もうだいじょうぶ。わたし　ちょっと　でかけてくる

ね」

そういって　りりちゃんは　いえを　とびだしました。

あめは　すっかりやんで　そらには　おひさまがでています。

ブレスレットがなくなっても　りりちゃんは、なきません。

ブレスレットが　なくなって　ざんねんなきもちよりも　ゆうまが　げんきになってママの　ほっとしたかおを　みたときの　うれしいきもちのほうが　おおきかったからです。

さあちゃんは　まだ　さくらんぼのキーホルダーを　さがしています。

りりちゃんは　さあちゃんといっしょに　さくらんぼのキーホルダーを　さがしました。

「あった！　みちの　はしっこに　おちてたよ」

「りりちゃん　いっしょに　さがしてくれて　ありがとう」

さあちゃんの　にっこりした　かお。

「どういたしまして」

りりちゃんは　また　はしります。

つぎは　だいちくんのところに　いきました。

タッキーは　まだ　きのうえです。

えだに　しがみついて　ぶるぶると　ふるえています。
「タッキー　がんばれ！　ぼくが　うけとめてやるから」
「タッキー　ゆうきをだして　ジャンプして！」
りりちゃんは　だいちくんといっしょに　こえが　かれるまで　さけびました。
ふたりのこえが　とどいたのか　タッキーが　かおをあげました。
「タッキー！」
ゆうきをだして　ジャンプした　タッキーは　だいちくんの　うでのなか。
うれしそうに　あまえたこえで　にゃあと　なきました。
「りりちゃんが　きてくれて　たすかったよ。ありがとう」
だいちくんの　にっこりした　かお。
「どういたしまして」
りりちゃんは　はしって　いえに　かえりました。

ゆうまは　すっかり　げんきになりました。
ママは　いつものように　りりちゃんの

「ただいま」
に　まけないくらい　げんきなこえで
「おかえり」
と　かえしてくれます。
あめのしずくが　のこる　こうえんを　りりちゃんは　あるきます。
「やあ　りりちゃん。ねがいごとは　きまったかい？」
アリさんの　こえがします。
「ブレスレットは　なくなっちゃったの」
「もう　ねがいごとを　したのかい？」
「うん。みっつも　かなっちゃった」
「えっ？　ひとつしか　かなわないはずだよ」
「ブレスレットが　かなえてくれたのは　ひとつだけ。でも　がんばったら　たくさんかなったの」
「りりちゃんが　じぶんで　かなえたの？　すごいなあ」
「ううん。みんなで　がんばったんだよ」

りりちゃんは　わらいました。
「ブレスレットがなくても　りりちゃんは　じぶんで　ねがいごとを　かなえられるんだね」
ママも　ゆうまも　さあちゃんも　だいちくんも　タッキーも　みんなが　しあわせになって　よかったと　りりちゃんは　おもっています。
みんなが　しあわせなら　りりちゃんも　しあわせです。
りりちゃんの　むねのなかでは　あめのしずくのブレスレットよりも　たいせつなものが　きらきらと　かがやいています。
アリさんは　りりちゃんをみて　まぶしそうに　めをほそめました。
はっぱのうえで　ひかっているのは　おひさまのひかりを　あびた　あめのしずくたち。
アリさんと　りりちゃんが　おはなしするのを　しずかに　みまもっているのでした。

もりのフリーマーケット

陽桜

あるひ。はるとは、かっているみけねこのみけこが、そそくさと、うらやまのもりのなかへと、はいっていくのをみつけました。

「みけこ〜。もりは、あぶないよ！」

と、はるとは、みけこにこえをかけて、あとをおいかけました。

きょろきょろと、どこかにきえてしまったみけこをさがしていると、もりのおくから、みんなでさわぐような、げんきなこえがきこえてきました。

はるとは、こえのするほうへ、こえのするほうへと、ちかづいていくと・・・。もりのなかで、なんと、どうぶつたちがたくさんあつまっていました。

『どんぐり5こで、りすのしっぽ！　りすのしっぽを、5ふん、かしてあげるよ！』

『はちのす1こで、おれのくまのちからを、1じかん、かしてやるぞ！　ちからしごと、

ちからくらべ。ど〜んとこい！』

『おいしそうなくさ1たばで、とおくまで、よ〜くきこえる、ながくてかわいい、うさぎのおみみは、いかがかしら？　どんなちいさな、ないしょばなしだって、きこえちゃうわよ？』

そんなかわった、どうぶつたちのかけごえがひびきわたっていました。とてもふしぎなうりものばかり。

はるとは、こっそり、おおきなきのかげにかくれました。

「え？　しっぽ？　ちから？　みみ？　そんなもの、どうやって、かせるんだろう？」

どうぶつたちが、ひとのことばをしゃべっているこわさよりも。はるとは、そのふしぎなどうぶつたちのうりもののほうが、きになってしかたありません。

ふいに、はるとのうしろで、おんなのこのこえがしました。

『あ、はると。ついてきちゃったの？』

ぎゃあっと、びっくりしてさけびそうになった、じぶんのくちをあわてて、てでふさぎました。はるとが、そうっとうしろをふりむくと、そこには、みけこがいました。

みけこもすこしあわてて、しーっ、しーっといいました。

『もう。ついてきちゃったものは、しかたない。ここは、もりのフリーマーケット。にんげんとばれなきゃ、だいじょうぶよ。』
とみけこはあきれながら、ためいきまじりにいったけれど。
すぐに、いつものいたずらっこのようなかおで、ひげをぴくぴくうごかしながら、ウインクしていいました。
『はると。せっかく、もりのフリーマーケットにきたんだから。ためしに、そこのりすのしっぽ、かりてみない？』
そういって、みけこからどんぐりを5こ、わたされました。
「ええ？　ぼくが？　ほんとうに、だいじょうぶ？　にんげんって、ばれないかな？　どんぐりで、かいものできるの？　しっぽってどうやって、かりるの？」
ぎもんだらけのはるとに、みけこはじぶんのしっぽを、ちょっぴりふきげんそうにびったん、びったんとふりながら、いいました。
『んもう！　だいじょうぶだってば！　りすにどんぐりわたして。しっぽ、かしてっていうだけよ！　ほら、いってらっしゃいな。』
わけのわからないまま、みけこにせなかをおされて、りすのめのまえに、ほうりだされ

てしまいました。
　みけこのいうとおりに、はるとは、りすにむかって、おずおずと、どんぐりをさしだしながら、
「あ、あの！　り、りすの。しっぽ！　えっと、その、ぼくに、かしてくれる？」
『どんぐり5こ、たしかに。はい、しっぽ。どうぞ！』
　りすのおじさんがそういうなり、なんと、ぽろんと・・・。おしりからしっぽが、きれいにとれてしまいました。そして、そのままはるとのおしりに、ひょいとくっつけました。
『きみは、たぬきさん？　それともきつねさんか？　にんげんのおとこのこに、じょうずに、ばけてるねえ。』
と、りすのおじさんにわらわれて、はるとはどきりとしました。ひきつってしまったはるとに、みけこはわらいながら、おいでおいでと、てまねきしました。
　はるとのおしりには、のりでつけただけみたいな、りすのしっぽが、ちょこん。けれども、ひっぱってもとれません。おしりをふると、ふさふさっと、しっぽもうごきました。
『さあ。はると。このおおきなきに、のぼってごらん。だいじょうぶよ。りすって、きのぼりが、とってもじょうずなんだから。』

せかすみけこに、はるとはおしりをたたかれて。しぶしぶ、めのまえのおおきなきにしがみついてはみたものの・・・。

「し、し、しっぽがついたくらいで、こんなおおきなき、ぼくがのぼれるわけないよ！ぼく、うんどうは、にがてなのに！」

『だいじょうぶだってば。さあ、さあ！　はると。がんばれ～！』

ぺしりと、またおしりをたたかれて、うながされたはるとは、おもいきって、きをのぼりはじめました。

すると、はるとはみがるなりすのように、おおきなきをすいすい、するするっと、とぶようにのぼっていきました。それはまるで、ほんもののりすになったかのようでした。

てっぺんのきのえだにすわって、まわりをみわたすと、もりのむこうのじぶんのまちまで、みわたせました。

「すごい、すごい！」

よろこぶはるとに、みけこがしたから、こえをかけました。

『お～い、はると！　そろそろ、５ふんだよ～！　しっぽがきえちゃったら、おりれなくなっちゃうよ？　はやくおりといで！』

「ええ〜！　わかった！　おりる、すぐおりるよ〜！」
はるとがのぼったときとおなじように、するすると、おおあわてのさかさまで、したまでおりてくると。そのあまりのあわてっぷりに、みけこがわらいころげました。
やくそくの5ふんがたつと、しっぽはしゅぽんときえて、もとのりすのおじさんのおしりにもどっていきました。
『ね？　たのしかったでしょ？　ほら、ほかのどうぶつのおみせも、みてまわろうよ！』
「うん！」
はるとは、もりのフリーマーケットにすっかり、むちゅうになりました。
みけことといっしょに、まつぼっくりをひろいあつめて、たぬきのしっぽをかりると・・・。きつねと、ばけっこしょうぶをしてみたり。
みけことがんばって、なんとか、はちのすをとると・・・。くまのちからをかりて、べつのくまと、おすもうをとってみたり。たのしいじかんはあっというまに、すぎていきました。
『はると。そろそろ、おうちにかえろ？』
「じゃあ。さいごに、このうさぎのみみで、おわりにしよう。だって、どれくらいよくき

こえるのか、きになるし！」

かわいいうさぎのおねえさんに、あおあおとした、おいしそうなくさを1たばわたして、うさぎのみみをかりました。

はるとがうさぎのみみで、そっと、みみをすませてみると・・・。いつもはぜったいにきこえないおとが、きこえてきました。

そよかぜに、はっぱがかさりとゆれた、ちいさなおと。とおくのおがわで、なにかがぽちゃりと、みずにとびこんだおと。まちのほうからは、ひそひそと、ひとのないしょばなしのこえまで。ほんとうに、いろいろなおとがきこえてきました。

そのなかに、ひときわ、ひくいこえで

『え、なんだって？　このフリーマーケットに、にんげんがまぎれこんでるって？　まさか。』

『いや、どうもそうらしい。もし、わるいにんげんなら、とっつかまえて、おれがおしつぶしてやろうか？』

さいごにきこえてきたこえに、はるとは、ききおぼえがありました。さっき、はちのすでちからをかりた、あのつよそうなくまのおにいさんのこえでした。

「た、た、たいへんだよ！　みけこ！」
いま、きいてしまったことを、しどろもどろみけこにはなすと、みけこのかおも、さあっとあおくなりました。
『はると！　つかまるまえに、もりをぬけてかえろう。ほら、はやく！』
うさぎのおねえさんに、みみをかえすと、なるべくあやしまれないように、はるととみけこは、おしゃべりしながら、でも、はやあしで、もりのでぐちへとむかいました。
『そこのたぬきさん。いや、きつねさん？　このフリーマーケットに、ほんもののにんげんがまぎれてるらしいからさ。いま、にんげんにばけてると、つかまるかもよ？』
といきなり、きのうえにいたりすのおじさんから、こえをかけられました。
あわてて、みけこがいいました。
『もう、かえるとこだから、だいじょうぶ。』
はるともつづいて、いいました。
「うんうん。も、もうかえるとこだし。いちいち、ば、ばけなおすのも、めんどうだし。」
はるとのことばに、りすのおじさんはくびをかしげました。
『ばけなおすのが、めんどう？　たぬきのくせに？　いや、きつねのくせに？』

りすのおじさんは、じろりとふしぎなものをみるように、はるとをながめはじめました。
その、しゅんかん！
みけこはじぶんのしっぽを、ささっととると、はるとのおしりにつけて、こうさけびました。
『はると！　もりのそとまで、にげて！』
『に、にんげん？　おまえがにんげんか！　おい、にんげんがいたぞ！』
もりのどうぶつたちがいっせいに、はるとたちをおいかけるのと。はるとがしっぽのないみけこをだっこして、ねこのようにおもいっきり、はしりだしたのは、ほぼおなじでした。
みけこのしっぽをかりたはるとは、せまいもりのきぎのすきまを、ねこのようにひょいひょい、するうりと、しなやかにとびこえながら、もりをかけぬけました。
やがて、もりのでぐちがみえてくると、うでのなかで、みけこがさけびました。
『はると！　あそこ、でぐち！　もりをでたら、どうぶつはもう、おってこれないよ！だって、もりのまほうが、きえるから！』
みけこのしっぽのおかげで、はるとはなんとか、どうぶつたちにつかまらずに、もりを

ぬけだすことができました。
かたで、いきをしながら、はるとはだっこしているみけこに、おれいをいいました。
「みけこ、ありがと。どうにか、にげきれたね！」
『にゃあ、にゃあ！　にゃお！』
みけこのしっぽは、はるとのおしりから、きえていました。
「あ、まほう、きえちゃったね。ざんねんだなあ。もう、みけこのこえ、わからないや。」
みけこのしっぽも、もとどおり。ふつうのみけねこにもどっていました。
それでも、はるととみけこは、かおをみあわせて、わらいました。しゃべれなくても、みけこがおもってることは、なんとなく、はるとには、わかるきがしました。
「さいごはちょこっとだけ、こわかったけどさ？　おもしろかったね。みけことといっしょなら、また、こっそり、いってみたいな！」
『・・・にゃ？　にゃあああ～ん♪』

人魚姫の歌

末永　志穂

リカは歌うことが大好きな女の子でした。

歌に興味を持ったのは、三才のときに見た、人魚姫のアニメーション映画がきっかけです。

その映画の中に、人魚姫が歌を歌い、海の生き物たちといっしょにダンスをおどるシーンがありました。

海の中をくるくると自由に泳ぎ回りながら、美しい声で歌う人魚姫に、リカはすっかり夢中になってしまったのです。

（私も、あんな風に歌ってみたい！）

それからリカは、毎日人魚姫の歌を練習しました。

映画の同じシーンを何度も何度もくり返し見ながら、人魚姫のまねをするのです。

歌をすっかり覚えてしまうと、リカは家の外で練習を始めました。

リカが住むこの小さな町にも、すぐ近くに海がありました。海の中で歌う代わりに、リカはその広い砂浜の真ん中で歌うことにしたのです。

外で歌うと、広い空や海にすいこまれるように、歌声はどこまでもまっすぐにとんでいきます。

もしかしたら、この歌声が、海の底にいる人魚姫にも聞こえているかもしれません。今にも水面に人魚姫があらわれて、「私もいっしょに歌うわ」と、声をかけてくれるかもしれません。

そんなことを考えながら、リカはほとんど毎日、浜辺で歌を歌い続けました。

時々、通りがかった近所のおじさんやおばさんが「やぁ、リカちゃんは歌が上手だねぇ」とほめてくれました。そうするとリカは、人魚姫にちょっぴり近付けたような気がして、とてもほこらしい気持ちになるのです。

もっと上手になりたいと、小学校に通い出したころ、リカは町でたったひとつある音楽教室に通い始めました。

音楽教室のユキノ先生はやさしく、とてもていねいに歌をおしえてくれました。リカ

はすぐにユキノ先生が大好きになりました。
「人魚姫といっしょにお歌を歌いたいの」
と、リカがこっそりうちあけたときも、ユキノ先生は、
「リカちゃんの歌声、きっと海の中の人魚姫にもとどいているわよ」
と、にっこり笑って答えてくれました。

リカが、小学三年生のとき、クラスがえがあり、アユミちゃんという女の子と同じクラスになりました。
三年生になって初めての音楽の授業で、アユミちゃんの歌を聞いて、リカはかたまってしまいました。
アユミちゃんは、ものすごく歌の上手な子だったのです。多分、リカよりもずっと。
音楽の先生や、クラスのみんながアユミちゃんの歌を口々にほめました。
アユミちゃんは、ちょっとてれくさそうに、でもとくいそうに、となり町の大きな音楽教室に通っていることや、コンクールでたくさん賞をもらっていることを話していました。
リカはうつむいて、ぎゅっと音楽の教科書をだきしめました。

アユミちゃんは歌も上手いし、かわいいし、おまけにかみの毛だって、人魚姫みたいに長くてふんわりしている。リカのぱっちりと切りそろえたおかっぱ頭とちがって。

（アユミちゃんの方が、私よりもずっとずっと人魚姫みたい）

リカは急に歌うのがはずかしくなりました。アユミちゃんのように上手に歌えないのに、歌が好きな自分が、はずかしくなりました。

その音楽の授業で、リカは歌うことができませんでした。はずかしいという気持ちがお腹の中でどんどん大きくふくらみ、リカののどまでふさいでしまったようでした。

悪いまじょに声を取り上げられた人魚姫のように、リカは急に歌えなくなってしまったのです。

悲しい気持ちのまま、しょんぼりと家へ帰りつくと、げんかんに音楽教室のレッスンバッグがかけてありました。よりにもよって今日は、音楽教室のレッスンの日でした。

あんなに楽しく通えていた音楽教室なのに、今日は行きたくなくてしかたありません。

理由を聞かれるのがいやでお休みしたいとも言えず、リカはけっきょく家を出ました。

重たいレッスンバッグをかかえたまま、とぼとぼと歩いていると、いつの間にか、いつもの浜辺にたどり着いていました。はあーっと、とても大きなため息がこぼれます。

音楽教室に行っても、今日は楽しく歌えないでしょう。声が出ないかもしれません。
今日の音楽の授業でそうだったように。
リカはレッスンバッグから、思わず持ってきてしまった音楽の教科書を取り出しました。
パラパラとめくり、今日習った歌のページを開きます。
（本当は……）
本当は、リカだって歌いたかったのです。
でも、アユミちゃんの上手な歌の後で、その歌をほめたみんなの前で、どうしても歌うことができなかったのです。
リカは大きく息を吸い込むと、小さな声で歌い出しました。
歌い始めると、ぎゅうぎゅうに押し込んでいたものが一気にとび出るように、体中から歌があふれ出しました。だんだん声が大きくなっていきます。リカは夢中で歌いました。

「こんにちは」
歌がひとくぎりついたところで、とつぜん後ろから話しかけられて、リカはとび上がりました。

いきおいよくふり返ると、そこには知らない女の子が立っていました。
水色のワンピースを着た、リカと同じくらいの子です。キラキラ光る長い金色のかみの毛に、深い青色の目をした、まるで絵本の中から出てきたような、お姫さまのような子でした。

（だれだろう？）
全く見覚えのない顔に、首をかしげます。
リカの住んでいる町は小さいので、だいたいの人は顔を知っているはずですし、第一こんな目立つ子は、同じ学校や近所にいるなら気付かないわけがありません。

「こ、こんにちは」
おずおずとあいさつを返したリカに、女の子はにっこりと笑いかけました。
「ねえ、あなた、とっても歌が上手いのね！」
「えっ」
いきなりほめられて、リカはほっぺたがカッとあつくなりました。
「その歌、私も知ってるわ。あんまり上手じゃないんだけど」
ふふっと小さく笑って、女の子が、リカが今歌った曲をまねして歌い始めます。

なるほど、たしかにその子の歌は、とても上手いとは言えませんでした。音も合っていませんし、声がか弱くて、なんだかフラフラして聞こえます。

「もっと上手く歌えたらすてきなのだけど」

歌い終わった後で、女の子が言いました。

「うーんと、背すじをのばして、もっとお腹に力を入れてみたらどうかな？」

リカはおそるおそる言ってみました。

「お腹に？」

「そうそう、海の向こうに『おーい！』って大声で呼びかけるみたいに」

きょとんとしている女の子に、リカはレッスンバッグの中から教本を取り出してみせました。

「これ、見て。上手く歌うためのコツが書いてあるの」

女の子がしげしげと教本をのぞきこみます。

「すごいわ、先生みたい」

「先生」という言葉で、リカはハッと思い出しました。

「いけない、音楽教室行かなきゃ！　おくれちゃう！」

あわただしく教本をしまい、立ちさろうとしたリカを、女の子が「まって」と呼び止めます。

「あなた、名前は？」

「リカ」

「私、レーナ」

レーナは、にこっと笑って言いました。

「ねえ、リカ。また明日も歌を教えてくれる？」

リカは少しだけなやみました。

（アユミちゃんの方が、きっとリカより上手に教えられるんだろうな）

でも、それよりもレーナにまた会いたくて、リカは「いいよ」と答えました。

「また明日ね、リカ！」

「うん、また明日」

レーナに手をふり、リカはかけ出しました。

さっきまでの悲しい気持ちは、いつの間にかどこかへ行ってしまったようでした。

次の日から、リカは学校が終わった後、また毎日浜辺に行くようになりました。
リカがねっしんに教えるおかげで、レーナはみるみる歌が上手になっていきました。
「リカは歌が好きなの？」
レーナからそう聞かれて、ドキッとリカの心臓が大きな音を立てました。頭の中に、アユミちゃんの顔がうかびます。
「す、好きじゃない」
思わずうそをついてしまいました。
「ふうん、私は好き」
なんでもないようにそう言ったレーナに、リカはおどろきました。
「上手く歌えるようになったから？」
「ううん、ずっと前から好きよ」
リカはますますおどろきました。
「レーナは、どうして歌が好きなの？」
「楽しいからよ。歌うのが楽しいの。だから好きなの。上手いとか下手とか関係なくね。でも、リカの歌を聞いたら、私ももっと上手くなりたいって思ったの。そしたらもっと楽

しく歌えるでしょう？」

リカはハッとしました。

（そうか、いいんだ）

歌が下手でも、自分よりも上手い子がいても、なにもはずかしいことはないんだ。「楽しいから好き」という理由だけで、じゅうぶんなんだ。

レーナの話を聞いて、リカは心の中がぽかぽかとあたたかくなりました。

次のレッスンの日、この音楽教室に新しいせいとがやってくると、ユキノ先生は言いました。新しいせいとというのは、なんとアユミちゃんのことでした。

となり町の音楽教室をやめて、ユキノ先生の教室に通うことにしたというのです。

「どうして、やめちゃったの？」

リカはびっくりして、アユミちゃんにたずねました。

「あのね、私、歌が好きなの。歌うととても楽しいから」

レーナと同じことを、アユミちゃんは言いました。

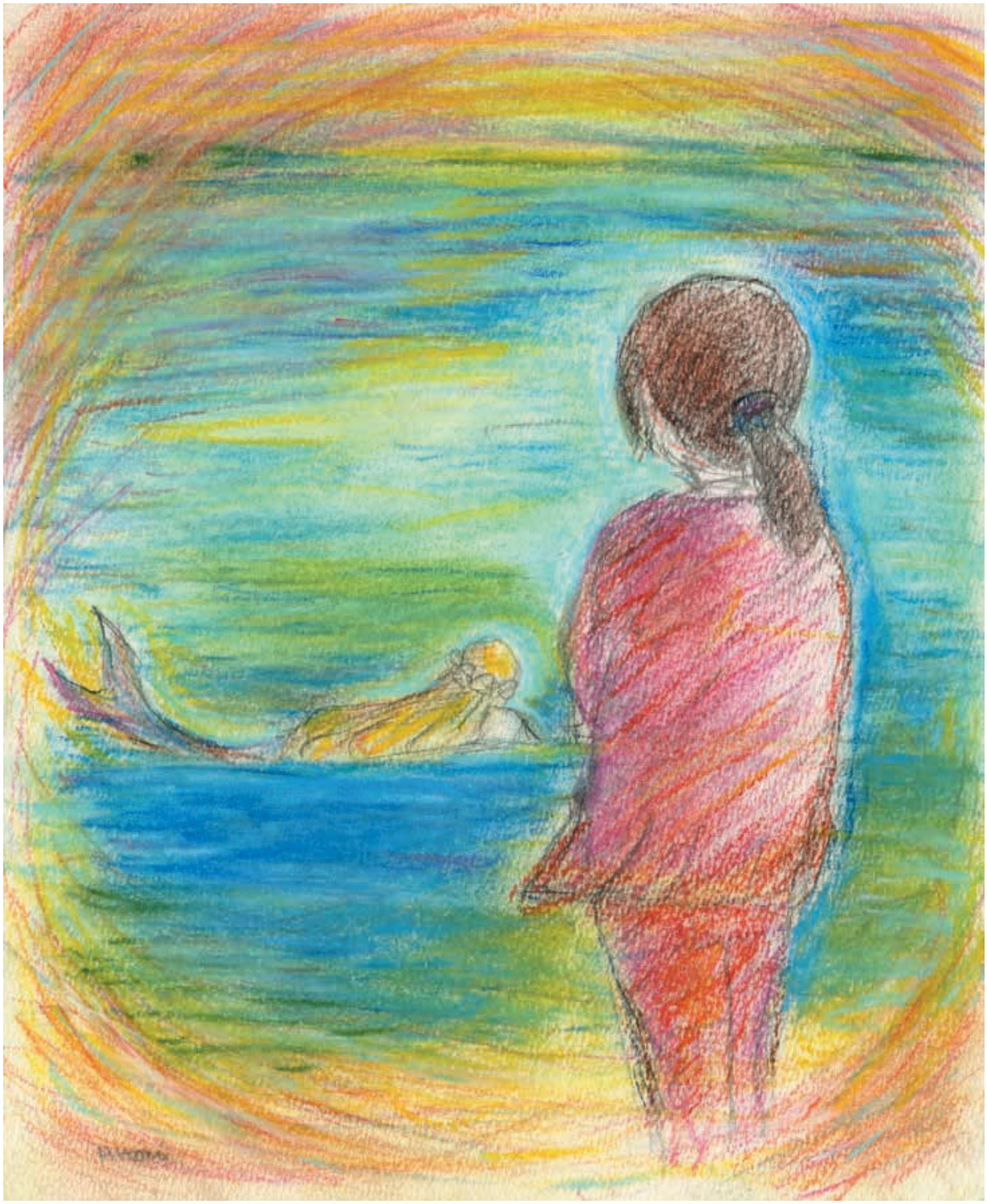
「でも、となり町の音楽教室、ものすごくきびしくて、先生もこわいの。だから、そこ

で歌うの、楽しくなくなっちゃったの」
ちょっぴり悲しそうに、アユミちゃんは続けました。
「そしたらね、ちょっと前に、リカちゃんが浜辺で歌ってるのを見てね、とっても楽しそうだなって、うらやましいって思ったの」
「ええっ！」
うらやましい、だなんて！
むしろ、リカの方が、歌の上手いアユミちゃんをずっとうらやましいと思っていたのに。
「だから、私もリカちゃんと同じ教室で、楽しく歌を歌いたくて」
よろしくね、とアユミちゃんは言いました。
ユキノ先生はさっそく、ふたりで歌う用にと新しい楽譜を用意してくれました。
アユミちゃんがソプラノパートを歌うのに合わせて、リカがアルトパートを歌います。
ふたりの歌声が合わさり、それはきれいなハーモニーになりました。
「すっごく楽しい！」
アユミちゃんがはしゃいで言います。リカも心臓がドキドキしていました。
「うん、楽しいね！」

ひとりで歌うのも楽しいけど、ふたりで歌うのもとても楽しい。
リカは、今すぐ浜辺に行って、レーナにこのことを話したいと思いました。

音楽教室が終わってまっすぐに浜辺に向かうと、レーナはリカを待っていたかのようにそこに立っていました。
リカは今日音楽教室であったことを、レーナに話しました。レーナはしずかにそれを聞いてくれました。
「よかったね、リカ。私もうれしい」
「うん、レーナもユキノ先生の教室においでよ。いっしょに歌おう。きっと楽しいよ！」
こうふんしたように話すリカに、レーナはゆっくりと首をふりました。
「私、そろそろ家へ帰らなくちゃ。今までありがとう。私、リカと会ってから歌がもっと好きになったわ」
そう言って、レーナは歌い出しました。
リカはその歌を知っていました。
人魚姫の歌です。

リカが小さなころに、何度もこの浜辺で歌った、あの大好きな人魚姫の歌でした。
「その歌……」
「私が小さいころによく聞いていた歌なの。毎日浜辺の方から聞こえてきてね。とても楽しそうですてきな歌だったから、覚えたの」
「ね、ねえ、もう一度歌って」
ふるえる声で、リカは言いました。
レーナはやさしくほほえんで、また歌い出しました。今度は彼女が歌うのに合わせて、リカもいっしょに歌います。
歌い終わった後、レーナの白い手が、リカの手をぎゅっとにぎりました。リカも、レーナの手を力強くにぎり返します。
「私も、歌が好き。楽しいから好き。レーナと出会って、もっと好きになったよ」
リカが言うと、レーナがうれしそうにうなずきました。
「また、リカの歌、聞かせてね！」
レーナは海に向かってかけ出しました。
そうして、少し高い岩の上から、いきおいよく海へととびこみました。



水面に、水しぶきがパシャンと高く上がります。その中に、リカは人魚姫のおひれを見たような気がしました。

（私の歌声は、本当に人魚姫までとどいていたんだ）

リカはいつまでも、レーナの消えた海の先を見つめていました。

おじいさんの　メガネやさん

伊東　希美子

ここは　むらはずれの　めがねやさん。
おじいさんと　おばあさんが　ふたりで　すんでいます。
「あーあ、ひまじゃのう。おきゃくが　ちっとも　こないのう」
おじいさんが　ためいきを　つきながら　つぶやきました。
「まちのなかに　おおきな　めがねやが　できましたからね。たくさんの　しながそろっていると　だいひょうばんの　ようですよ」
「そうか。きんじょの　ひとたちも　まちへ　どんどん　うつってしまって　だれもおらんようなったしなぁ。やって　くるのは　えさを　さがしに　おりてくる　やまのきつねぐらいで　さびしいもんじゃ」
おじいさんは　にがわらいを　しながらせきをコンコンと　しました。

「このごろせきがでますね。だいじょうぶですか？
そういえば　きのうもきつねが　こちらをじっと　みていましたよ。たべるものが　ほしいのかと　おもって、ごはんの　のこりを　そとに　だしておいたら　いつのまにか　なくなってましたよ」
おなかを　すかせた　きつねが　むしゃむしゃたべている　ようすが　めにうかび、おばあさんは、すこし　ほほえみました。
「こんな　ちいさな　みせは　ようずみじゃのう。いよいよ　みせじまいに　せんと　いかんかのう」
ふたりは　かたを　おとしながら　はなしをしています。
みせのうらには　やまが　せりだし　まわりに　いえはなく　ここは　ぽつんといっけんやと　なっているのです。ふたりは　うらのはたけで　おこめや　やさいを　つくってくらしを　たてています。
「こんにちは。ぼくに　めがねを　つくって　くれませんか？　とおくのものが　みえないのです」

おじいさんの　みせに　おきゃくが　やってきました。大きなコートをはおり、ぼうしを　ふかぶかと　かぶっています。

「はいはい。しょうち　しました。それでは　レンズの　はいった　めがねを　かけてみて　くださらんか。はっきりみえるレンズにせんと　いかんからの。めがねの　おおきさも　はかりましょう」

おじいさんは　おきゃくの　めとみみの　ながさを　はかりました。えらんだレンズをめがねに　はめて　ぴったりかどうかも　しらべます。おじいさんは　このときが　いちばん　たのしくて　ついつい　ちいさなこえで　うたを　うたって　しまいます。

『とんとんとん　きゅっきゅっきゅっ
はりがね　まげて　つくりましょ
みみに　かける　ところをね
あなたに　ぴったりのめがねをね
きゅきゅっきゅ　きゅっとつくりましょ』

「さあできた」
おじいさんから　めがねを　うけとった　おばあさんは　めがねを　みずであらい、ていねいに　ふきあげました。
「どうかのう？　かけてみて　くださらんか」
おじいさんから　めがねを　うけとったおきゃくは　かがみのまえで　めがねをかけ、じぶんの　すがたを、しょうめんから、よこから、ほれぼれと　みました。
「これはすばらしい。わたしは　なかなかのおとこまえ（ウン）
あたりのものも　はっきりみえるし　こいつはすごい。ありがとう」
おきゃくは　ぴょんぴょんはねて　よろこびました。
はねまわった　ひょうしに　おしりから　しっぽがびよーん。きんいろのふわふわしっぽが　とびだしました。
おじいさんと　おばあさんは　おどろいてかおを　みあわせましたが、きがつかないふりをしました。こまって　たずねてきたのだから　だまされても　かまわないと　おもったからです。
「めがねの　おれいに　やまのおいしい　きのみを　どっさり　もってきています。どう

ぞ　うけとって　ください」
「それは　どうも　ありがとう」
おじいさんと　おばあさんは　にっこりわらって　こたえました。
「ぼくの　ともだちにも　めがねをつくって　くれませんか？　めがわるくて　こまっているのです」
「ええ、ええ　いいですとも」
おじいさんは　やさしく　こたえました。
よろこんだ　おきゃくは　しっぽを　ふりふり　やまのおくへと　かえっていきました。

「おじいさん、あのおきゃくは　やまの　きつねの　ようでしたね。しっぽが　みえてるとも　きづかずに　しっぽを　ふりふりふって　かわいかったですね」
「しっぽを　ふりふり　ふっとったのう。ちゃんと　はなしをしておったし、わしらはゆめを　みているのかのう。こんな　ゆめなら　だいかんげいじゃ、ハハハ」
ふたりは、おしりを　ふりふりふって　まねてみたりして　わらいました。

「おじいさん　やくそくどおり、めがねを　つくってほしくて、きましたよ」
　つぎのひ、また　きつねが　やってました。
おじいさんに　つくってもらった　めがねを　ちゃんと　かけています。
「こんどは　だれの　めがねを　つくるんじゃ？」
「いっしょに　きているんだけど　すごく　からだが　おおきいから　はずかしがって
ぼうしと　コートを　きてるんだ」
　きつねは　うしろを　ふりかえりました。
　そこには　からだの　おおきな　おきゃくが　もじもじと　はずかしそうに　たってい
ました。そして　ひくいこえで　いいました。
「めが　はっきり　みえないから　だいすきな　かきのみとおもって　がぶりとかじった
ら　まつぽっくりでさ。いたい、いたい」
「はいはい。わかった。わかったよ」
　おじいさんと　おばあさんは　めを　ほそめていいました。そして　めがねを　つくり
はじめました。ちいさなこえでうたいながら。

『とんとんとん　きゅっきゅっきゅっ
はりがね　まげて　つくりましょ
みみに　かける　ところをね
あなたに　ぴったりのめがねをね
きゅきゅっきゅ　きゅっと　つくりましょ』

「さあできた」
おじいさんから　めがねを　うけとった　おばあさんは　めがねを　みずであらい、ていねいに　ふきあげました。
「どうかのう？　かけてみてくださらんか」
おじいさんから　めがねを　うけとった　おきゃくは　めがねを　かけました。
おきゃくは　かがみのまえで、めがねをかけた　じぶんの　すがたを　しょうめんから、よこから、ほれぼれと　みました。
「うおー、うおー、これはすばらしい。わたしは　なかなかおとこまえ（ウン）
あたりのものも　はっきりみえるし　こいつはすごい。ありがとう」

おおきなおきゃくは、どしんどしんと　じゃんぷして　よろこびました。そのひょうしに　おしりから　びよこーんと　しっぽが　とびだしました。

「めがねをつくってくれて　ありがとう」

おきゃくは　おれいに　はちみつを　どっさりおいて　やまのほうへ　かえっていきました。

「おじいさん　こんどは　くまでしたね。しっぽが、びょこーんとでてきて　かわいかっですね」

「ああ、ほんとだね。めがねがあれば　こまることも　なくなるじゃろ」

ふたりは、かおを　みあわせながら、ほほえみました。

つぎのひ　また　きつねが　やってきました。

「おじいさん。めがねを　つくってほしい　ともだちを　つれてきました」

めがねをかけた　きつねが　いいました。

「こんどは　だれの　めがめを　つくるんじゃ？」

「からだに　ふれると　ちくちく　いたいから、からだに　ほうたいをまいて　きてるん

だ」

きつねは　うしろを　ふりかえりました。

そこには　まんまるからだの　ハリネズミが　ほうたいを　ぐるぐるにまき　はずかしそうに　たっていました。

「めがわるくて　ミミズとおもったら　いとくずだったんだ。ぼくに　めがねをつくって」

「はいはい。わかった。わかったよ」

おじいさんと　おばあさんは　めを　ほそめました。そして、ふたりは　いしょうけんめい　めがねをつくりました。

ハリネズミは、かがみにうつった　じぶんのすがたに　なかなのおとこまえ（ウン）とだいまんぞく。　おれいに　やまの　きのこを　どっさりおいて　かえっていきました。

つぎのひも　きつねは　ともだちを　つれて　きました。こんどは　へびのようです。からだには　マフラーを　ぐるぐるまきにしています。

「ぼーっとしか　みえないから　かどにぶつかってばかりで　からだが　ぐるぐるに　からまっちゃった。ぼくにめがねを　つくって」

おじいさんと　おばあさんは　おかしくて　たまりません。おもわず　くすくすっと　わらいましたが　めがねは　ちゃんと　つくって　あげました。

へびは　かがみにうつった　じぶんのすがたに　なかなかのおとこまえ（ウン）とだいまんぞく。こんどは　やまに　さいている　はなを　どっさりおいて　よろこんで　かえっていきました。

「おや？　おじいさんの　おみせが　しまっているぞ。どうしたのかな？」

めがねの　みみのところを　なおしてもらおうと　やってきた　きつねは　くびを　かしげながら　ドアを　たたきました。

『どんどんどん、どんどんどん』

「はいはい、ただいまあけますよ。あらあら　あのときの　おきゃくさんね。おじいさんは、びょうきに　なって　ねているの。めがねは　もう　つくれないわ　ごめんなさい」

おばあさんの　はなしをきいた　きつねは　びっくり。そのひょうしにしっぽがぴよーん。

「こりゃ、たいへんだ！」

きつねは　やまのなかへ　すっとんで　かえっていきました。

「おばあさん　あけてください。めがねを　つくってもらった　きつねです。やまの　なかまも　いっしょです」

おばあさんは　ドアを　あけました。めのまえには　きつね、くま、ハリネズミ、へび、みんな　めがねを　かけて　しんぱいそうに　たっています。

「これを　おじいさんに　のませてください。やまの　きのみをすりつぶし　がまがえるの　じいさんが　ひでんのやくそうを　いれて　つくったくすりです。このひょうたんのなかに　はいっています」

そういって　きつねはうやうやしく　おばあさんにわたしました。

「おやまあ。わかりましたよ。いますぐに」

おばあさんは　なんにも　うたがわず　やまのみんなが　はこんでくれた　やくそうを

おじいさんに　のませました。
『ごくごくごく　ごくごくごく』
「うーん。こりゃ　にがいのう」
「おいじいさん　やまのみんなが　もってきたのですよ」
おばあさんは　しんぱいそうに　たたずんでいる　やまのなかまのほうに　めをやりながら　いいました。
「おお、おまえさんたちか。そりゃ、ありがとう。なんだか　からだが　ぽかぽかしてきたぞ。びょうきなんか　ふっとんで　しまいそうだ」
おじいさんの　かおいろは　ぴんくになり、コンコン、せきをしていたのも　ふしぎとまりました。
「おじいさん、にんげんのふりをして　おみせにきて　ごめんなさい。めがねを　つくって　もらったおかげで　ミミズも　みえるようになったし　からだも　からまらなくなったよ」
きつねが　そういうと、へびとハリネズミは　からだを　まっすぐにし、にっこりわらって　ピースサインを　しました。

「これからも　どうぶつに　めがねを　つくって　ほしいのです。まいにち　はちみつをとどけます。げんきに　なりますよ」

めがねをかけた　くまが　ふかぶかと　あたまを　さげました。

「ぼくは　やまの　きのこを　まいにち　とどけて　あげるよ、えいようまんてんさ」

めがねをかけた　ハリネズミが　むねをはって　いいました。

「ぼくは　やくそうの　おくすりを　しゃしゃしゃの　くねくねのしゃーと　あっというまに　とどけるよ。そうだ、おはなもね」

めがねをかけた　へびは　はなのしたを　こすりあげ　じしんたっぷりに　いいました。

「ぼくは　めがわるくて　こまっている　なかまを　つれてくるから　よろしくね」

きつねは　おじいさんのそばに　かけより　あたまをさげました。

「よかったですね。おじいさん。みんなのために　またいっしょに　がんばりましょう」

おばあさんは　なみだを　ためながら　おじいさんのてを　にぎりしめました。

「そうかい、そうかい　ありがとう。みんなのきもち、うれしいよ。めがねのちょうしがわるいとき　いつでも　きておくれ。これからは　どうぶつむらの　めがねやさんと　な

まえを　かえようかのう　わははは」

おじいさんの　わらいごえに　やまのなかまも　てをたたいて　よろこびました。

あめのしずくのブレスレット

井上　まゆみ

あめが　しとしと　ふっています。
りりちゃんのかさに　あまつぶが　たたん　たたんと　あたります。
しゃがんで　みずたまりを　のぞいてみると　いっぴきのアリさんが　おぼれていました。
「たいへん！　つかまって」
りりちゃんの　ひとさしゆびに　アリさんは　しがみつきました。
「りりちゃん、ありがとう。おかげで　たすかりました」
「どうして　なまえを　しってるの？」
「むかいあってみれば　わかります」
りりちゃんは　はっとして　むねの　なふだを　おさえました。
「たすけてくれた　おれいに　たからものを　さしあげます」

第二部

車の中でピクニック

山崎　幸正

「母さん、学校まで送ってよ」

せなかのランドセルをゆらしながら、朝ご飯をモグモグさせて、急いでくつをはくマホちゃん。はくというより、ねじこむ感じです。

「またなの。こまったわね。だいたい、起きるのがおそいから、こうなるのよ」

アパートのげんかんを飛び出し、水色の軽自動車のバンに乗りこむ母さんとマホちゃん。エンジンをかけると、ズガズガズッダーとにぶい音。なんとか動き出しますが、今日もエンジンはつかれ気味のようです。

「エンジンの調子、悪いわねぇ。最近、ずっとだから、今日にでも、車のお店に行ってみようかな」

独り言のようにつぶやく母さん。

そんな声はどこふく風、助手席のマホちゃんは、相変わらずのモグモグの口で、軽バンに追いぬかれて行く、同じクラスのミクちゃんとアンナちゃんに向かって、ごきげんな顔で手をふります。ふたりとも「いいなあ」と言う顔つきで、通り過ぎる軽バンに手をふり返します。

母さんは大変かも知れませんが、マホちゃんにとっては、こうして、母さんといっしょに軽バンに乗って学校に行くときが、とっても楽しい時間なのです。ゆったりとした、ふんわりとした、居心地のいい時間。前がみをなで、手でひさしを作り、遠くに目をやると、広がる青空の下、連なる山々が赤く色づいています。

「見て、見て。一面に赤くて、すごくきれい。山のふもとのミズモト公園、今度の日曜日、行こうね。保育園のころ、行ったよね」

「そんなことより、朝はきちんと起きてよ。マホのまどろみタイム、長過ぎよ」

「ふたりだけの親子でしょ。仲良くやろうよ。よろしくね、母さん」

マホちゃんのあっけらかんとした態度に、さすがの母さんも、しかることをわすれ、口元をゆるめるばかりでした。

学校が終わってアパートに帰ると、ランドセルをおろし、すぐに台所に向かいます。
せっけんで手をあらい、米をといですい飯器にかけます。次に、キャベツとレタスをあらい、ハムといっしょにきざんでマヨネーズであえれば、ハムサラダの出来上がり。皿にもってラップをまいてれいぞうこに。あとは、ポットに水を入れてスイッチをおします。
これが、仕事を終えて六時過ぎに帰って来る母さんのための、いつものお手伝いです。
今日は友だちと遊ぶ約束もないので、居間でテレビを見ながら、算数と国語の宿題に取りかかります。
空が暗くなり始めると、まどから入る風が冷たく、立ち上がって、まどをしめるマホちゃん。
（外は寒いだろうな。毎日、お仕事、大変だな。早く帰って来ないかなあ）
朝は、つい、あまえてしまいますが、母さんの帰りを独りで待ちながら、ノートにえんぴつを走らせていると、ふと、母さんの顔がうかび、
（早く大人になって、楽をさせてあげたいな）
と思うのでした。
特に、最近の母さんはつかれ気味のようです。夕食の片付けが終わってテレビを見てい

ても、いつの間にか、うたたねをしていることが多く、おふろ上がりにかみをとかしていても、鏡にうつる自分の顔に向かって、「そろそろ、シラガぞめのお世話にならないといけないかな」と言っては、ため息をついているのです。

外はどんどん暗くなっていき、時計は六時を回って、そろそろ、帰って来るころ。宿題を終え、せのびをすると、外から、ガズズンギッダンと、さわがしい音がひびいて来ました。

（帰って来た、帰って来た。あの音はまちがいなく、母さんの軽バン）

思わず、笑みがこぼれました。

白線だけのアパートのちゅう車場に軽バンをとめて、カバンとエコバッグをかかえながら、軽バンのドアをしめる母さん。げんかんのドアを開けると同時に、

「ただいまー」

と明るい声。

「お帰りー、母さん」

母さんの笑顔を見て、マホちゃんも一安心です。

おくの部屋で着がえ、むねまである長いかみを束ねたら、台所でエプロンをつけ、エコ

バッグから魚やジャガイモやタマゴを取り出す母さん。
「軽バン、やっぱりダメみたい。今日、お仕事早めに切り上げて、車のお店に行ったけど、エンジンがいつ止まってもおかしくない状態だって。十五年近く乗ったからね。新しい車、すすめられちゃった」
首をすくめ、夕ご飯の支度にかかる、エプロンすがたの母さん。
マホちゃんは何も答えず、居間のまどべに立ち、ちゅう車場の軽バンを見つめながら、
（軽バン、いなくなっちゃうの？　あたしが生まれたときには、もう、いたんだよね。あたしよりも、ずっと、母さんと長くいるんだよね）
と心の中でつぶやくと、
「新しい車、買っちゃおうかな」
と母さんの声が、せなかごしに聞こえました。
（古くてガタガタだけど、水色でかわいくて、出かけるときは、いつも、いっしょだったのに）
ちゅう車場の外灯のうす明かりの下で、静かにねむる軽バン。
（毎日、母さんを仕事場まで運んで、そして帰って来て。それに、あたしを学校に連れて

行ってくれて。遊びに行くときだって、どこに行くときだって、いつも、いっしょだったのに）

どんなに軽バンを見つめても、軽バンは何も答えず、ただ、冷たい夜風にふかれ、たたずんでいるだけです。マホちゃんは自分の心の中にも、冷たい夜風がふきぬけていくのを感じました。

次の土曜日、母さんに連れられ、軽バンに乗って、車のはん売店に向かいました。母さんは、いつもどおりの顔でハンドルをにぎっています。でもマホちゃんには、そんな様子が、ちょっぴり不満です。

（母さんは軽バンとの別れがつらくないのかな。今まで、わが家のために、いっしょうけんめい、働いてきたのに）

店に着くと、わかい男性の店員が、

「いらっしゃいませ。先日はご来店、まことにありがとうございました。新しいお車、ごけんとういただけましたでしょうか？」

と明るくさわやかな笑顔で応じます。

「いい車があればね」

「ごもっともでございます。今日はお時間もございます。どうぞ、ごゆっくりと、お選びください。おや、かわいいおじょう様ですね。おく様に似たのでしょうね」

最初は乗り気でなかったマホちゃんも、「おじょう様」の言葉に、すっかり、うかれ気分。母さんもむすめをほめられ、むすめを通じて自分もほめられ、まんざらでもない様子です。

それに、店内には、いく台もの新しい車が、「私たちを見て」と言わんばかりに、むねを張って、ほこらしげにならんでいます。まるで、ファッションショーのモデルさんのようです。

店員といっしょに、店内の車を見て回る母さんとマホちゃん。ピンピカのボディに、ふたりの顔があでやかにうつります。曲線のボディラインもゆうがで美しく、思わず、見とれてしまいました。

ドアを開けたときのさわやかな香りと、やわらかな座席のかんしょく。それに、おしゃれなインテリアは、いつか、ミクちゃんの母さんの車に乗せてもらったときの、ちょっぴり、うらやましかった気持ちがよみがえります。

（新しい車を買えば、もう、あんなさみしい気持ちにならずにすむんだ）
車の天井を見上げながら、うっすらと思うマホちゃん。
母さんも、運転席に座りハンドルをにぎっては、
「いい感じねー」
と声をはずませています。
店員はにこにこの顔で手を組みながら、ふたりの様子を見つめています。
一通り見て回ると、テーブルの席に案内され、コーヒーとケーキが差し出されました。
おしゃれなコーヒーカップと、大つぶのクリがのった、生クリームたっぷりのショートケーキ。マホちゃんはすぐにフォークに手がのびました。
「お目にとまったお車は、ございましたでしょうか？」
店員の声がはずみます。
「そうねぇ、二番目に見た車がいい感じかな」
「やはり、そうでしたか。ぼくもそう思いました。上品なおく様と、かわいらしいおじょう様には、ぴったりのお車でございます」
両手を広げるオーバーなジェスチャーが笑いをさそい、ふたりの気分をやわらかく包み

こんでいきます。
マホちゃんはおしとやかな仕草でコーヒーとケーキを口に運び、おじょう様気分を楽しんでいます。
「マホ、色はどうしようか？　今までは水色だったけど、思いきって赤にしようかな。二番目に見た、あの車みたいに」
マホちゃんが返事にこまっていると、
「おく様のようなかがやく女性には、お似合いのお色でございます」
と店員の声が一だんと高くひびきます。もう、すっかり、店員のペースです。
にぎにぎしいやり取りをよそに、ふと、外を見ると、店のちゅう車場に、じまんの水色もすっかり色あせた、古めかしい軽バンのすがたが目に入りました。何も語らず、ただ、静かにたたずんでいます。
見つめていると、むねのおくから、後ろめたい気持ちが、さざ波のようにおし寄せて来ました。うかれ気分の岩に当たっては、飛び散るさざ波。でもすぐに新しい波が、また、おし寄せて来ます。寄せては返すさざ波が、何度も岩に当たると、とうとう、うかれ気分の岩は、くだけ散ってしまいました。

すると、さっきまで聞こえていた母さんと店員の声が遠ざかり、新しい赤い車が、急に色あせて見えました。

でも、もう、話はまとまったようです。店員はありったけの笑顔で、母さんに礼を言っています。新しい車は、一か月後に来ることになりました。

軽バンに乗りこむふたりを、深々と頭を下げ、満面の笑みで見送る店員。その笑顔をよそに、軽バンはギズギズダッダーとにぶい音を立てながら発車しました。

帰りの軽バンの中で、マホちゃんは助手席のドアの小さなへこみに気づきました。これはまだ保育園のころ、買い物中の母さんを待ちくたびれて、ひとり車の中で、いじれてかんだ歯のあと。

手前のボックスに付いた小さな紙のはへんは、母さんにおこられ、泣きながらはがしたクマのシールの残り。

遊園地の広いちゅう車場に軽バンをとめ、帰るときに、どこにとめたか分からなくなり、やっと見つけたときは、ホントうれしかったっけ。

まどの外の夕ぐれの景色に、様々な場面がうかんでは消え、消えてはうかびます。

（古くてデコボコだけど、それは母さんとあたしを長く支えてきたしょうこ。あたしが生

まれる前からの、わが家の働き者だもん）

くれゆく景色に目を向けると、西の山に太陽がかたむき、色づく山を、いっそう、赤くそめながら、しずもうとしています。

（もう一度、軽バンといっしょに出かけたい）

マホちゃんは、ハンドルをにぎる母さんを見上げました。

「明日の日曜日、ミズモト公園に行こうよ。紅葉、きっと、きれいだよ。この間、話したよね」

「そうね、久しぶりに行こうか」

運転する母さんの横顔が、差しこむ夕日を浴びて黄金色にかがやき、顔のりんかくがぼやけ、ものうげで、やるせなさそうな、そしてちょっとこわい顔に見えました。

（母さんはときおり、こんな顔をする。いくつもの悲しみをぬり重ねたような。口には出さないけど、やっぱり、母さんだって、軽バンとの別れが悲しいに決まってる。でも、いそがしい毎日の中で、それだけに気をとられてはいられない。そうだ。きっと、そうなんだ）

見上げる母さんの顔が、まぶしく見えて仕方ありませんでした。

よく日、母さんとマホちゃんは、軽バンに乗って、ミズモト公園に向かいました。ふたりとも、おそろいのリボンとワンピースで、ちょっと、おめかししています。エンジンは相変わらずの音でしたが、別れが近いことを思うと、ふたりとも、そのことは口にしませんでした。

くもり空のすずしい風の日でしたが、山のふもとのミズモト公園は、大勢の人たちでにぎわっていました。

見わたす山々は秋の衣がえの真っ最中で、公園のカエデやイチョウやヤマボウシは、あでやかな赤いドレスを身にまとっています。同じ赤でも、真っ赤な赤もあれば、うすい赤もあり、黄色に近い赤もあります。どれもこれも、色とりどりの、あざやかな赤たちです。

公園の真ん中の池のほとりには、色づいたドウダンツツジがならび、おいしげるススキやヨシが、風にやさしくゆれていました。

秋の風をいっぱいに浴びながら、公園を散歩する母さんとマホちゃん。心がすき通っていくようです。

紅葉に目を見張る人たちや、しばふにシートをしいて、お弁当を広げる人たち。ベンチでくつろぐおじいさんやおばあさん。大きなカメラを三きゃくで固定し、何回もシャッ

ターを切るおじさんのすがたも見えます。
「そうそう、この大きなカエデの木。この下で、お弁当、食べたわね。まだ、マホが今よりずっと小さかったころ」
「覚えてる、覚えてる。母さんお得意の、サンドイッチのお弁当。いっぱい食べちゃったな」
シートをしいて、母さん手作りのおにぎりを食べながら、学校や友だちのことを話します。
「ミクちゃんって、すごいおしゃれ。つめをピンクにそめてたから、『母さんのマニキュアを借りたの？』って聞いたら、『ううん、百円ショップ』だって。次はイヤリングもほしいみたい」とか、「アンナちゃんって、ホント面白い。この間も、算数のテストがひどい点だったのに、『のびしろは一番あるもん』だって」とか、はしゃいだ声で話すマホちゃん。
母さんは「そうなの」とか、「おかしいわね」とか言いながら、やさしく相づちを打っています。
マホちゃんがふたつ目のおにぎりを手にしたとき、ほおに雨つぶが当たるのを感じまし

た。見上げると、空はどんよりとした雲におおわれ、木々の赤い葉に雨が当たり、小さくゆれ出していました。

ふり始めた雨が、またたく間に、ふたりの顔をぬらし、おにぎりやシートをぬらし、母さんはこまった顔で、あたりの様子をうかがっています。

雨は勢いを増し、色づいた葉が上下にゆれ、公園のあちこちに、水たまりが出来始めました。もう、雨は止みそうにありません。

公園にいた大勢の人たちが、ちゅう車場に向かって走り出しました。子どもたちの「うわー」っとさけぶ声が聞こえます。母さんとマホちゃんも、おにぎりやシートをバッグにしまいこみ、大急ぎでちゅう車場に向かいました。

雨はなおもふりつづけますが、色あせた水色の軽バンのボディが、雨をしっかりとはね返し、ふたりがちゅう車場にもどるのを待ちかまえています。

ドアを開け、すべりこむようにシートに座る母さんとマホちゃん。マホちゃんのぬれた顔やかみをタオルでぬぐい、それが終わると、やっと、自分の顔や頭をぬぐい、大きなため息をつく母さん。

雨はさらに勢いを増し、周りの車が次々とちゅう車場を出て行きますが、母さんは運転

席に座ったまま、ハンドルをにぎろうともしません。
ちゅう車場が軽バンだけになっても、運転席に座り、ただ、じっと、雨の公園を見すえています。はげしい雨音が、ふたりの耳元にひびいています。
「残りのおにぎり、ここで食べようか。雨の紅葉見物もステキなものよ」
母さんはマホちゃんを見つめながら、にっこりとほほえみます。
「雨の中、軽バンの中でピクニックだね」
マホちゃんも笑顔で答えます。
増々強くなる雨の中、公園のちゅう車場にポツンと残された、古めかしい水色の軽バン。
ふたりは軽バンの中で、雨にゆれ動く、木々の赤い葉を見つめながら、おにぎりを口に運び、水とうの水を飲みほします。
どしゃぶりの雨の中、風もふき荒れ、木々の葉は枝ごと大きく首をふり、水たまりはどんどん広がっていきます。軽バンの屋根をたたくけたたましい雨音が、ふたりの体中にひびきわたり、フロントガラスにできた雨の川が、紅葉にそまる公園の景色をゆがませています。
でも、軽バンは、母さんとマホちゃんを、しっかりと、守っています。

「今まで、お世話になったわね。うれしいことも悲しいことも。本当にありがとう。そして、おつかれさま。わが家の軽バン」

そう言うと、母さんはうっすらと笑みをうかべました。

(母さんも、軽バンとの別れをおしんでいるんだ)

マホちゃんは、母さんの言葉に、自分の言葉をつなげました。

「たくさんの思い出をありがとう」

でもそう言うと、むねのおくが、しめつけられたように苦しくなり、思わず顔をうずめた、そのとき、

「ビッビィーン」

クラクションのような音が、はげしい雨音の後ろで聞こえた気がしました。

母さんの顔を見ると、何も聞こえていないようです。耳をすませてみると、

「ビッビィーン」

とかすかに聞こえます。

今度は、心をすませてみると、その声が、はっきりと、聞こえました。

「ビッビィーン!」

（きっと、軽バンのお別れの言葉なんだ。本当にありがとう。水色の軽バン）

心の中でそうさけんだとき、マホちゃんのむねのおくが、雨のしずくをこぼしてゆれる一枚の葉のように、小さくうずいてふるえました。

まごころのともしび

樋口　達也

「幸、瞳先生、学校変わるぞ」
新聞を読んでいたお父さんが、言った。
「エープリルフールだよね。だまされんよ」
と、ぼくが言うと、お父さんは、
「嘘なもんか。青木瞳、新採で大島小学校」
と、新聞を指さした。
ぼくは、五年生になっても絶対に瞳先生のクラスになりたい。きっとなれる。ずっと、そう思っていた。
「先生、幸君が勉強を好きになるように一生懸命頑張るからね」
先生の優しい顔と言葉が、浮かんできた。

ぼくは、勉強が苦手だ。何が苦手って、読み書きが苦手だ。本が読めない。苦労して字を書いても、字が躍ってノートのマス目からはみ出してしまう。

三年生の家庭訪問のとき、担任の先生が、ぼくのことを思って、特別支援教室に入ることを勧めてくださったが、お母さんは、

「他の子より、理解に時間がかかるだけだと思います。頑張ればなんとかなりますから、もっと努力させますから・・」

と、その折角の提案を断った。

今から八ヶ月ほど前、四年生の一学期が終わって、ぼくが通信簿を持って帰った日の夜遅く、トイレに起きて、廊下を通っていたら、お父さんとお母さんの声が聞こえてきた。

「優と賢は、優秀なのにね」

「幸もぼくときみの子じゃないか。こんなはずはないよ」

「まだまだ、頑張りが足りないのよね」

「夏休み、優と同じ塾に入れてみるか」

「そうだわね。じゃ、塾代、稼がないとね。明日、仕事増やせるか聞いてみるわ」

「無理しないでくれよ」

少し開いていたドアの隙間から、その会話を立ち聞きしてしまったぼくは、ひどくがっかりした。

夏休みは家でのんびりできるし、二歳年下の賢と二人で思いっきり遊べると、ずっと楽しみにしていたからだ。

言葉通り、お母さんは、歯医者さんの受付の仕事を増やした。

ぼくは、兄ちゃんが行っている進学塾に入れられて、賢は、夏休みも引き続き学童保育所に行くことになった。

夏休みが十日も過ぎた頃だった。

「賢は、いいよな、勉強できるから・・」

ぼくは、風呂の湯船の中で、そう言った。

頭を洗っていた賢は、聞こえなかったのか何も言わなかった。ぼくは、続けて言った。

「いくら勉強しても、何もわからんし。もう、塾には、行きたくない。お金の無駄や。塾の先生に『何で、これぐらいのことがわからんの』って、言われても、わからんもんはわからんし。ただ、じっと黙っとくしかない。賢には、こんな気持ちわからんやろなぁ」

賢は、湯船に入ると、小声でこう言った。

「チィ兄ちゃん、明日、塾をさぼって虫採りに行かんか？　ぼく、もう学童保育に行きたくない！　いっしょにサボろ！」
「いいね！　でも、無断欠席は親に即電話されて大変なことになるよな」
「でも、やっぱり、学童に行きたくない！」
「よし、こんな時は、兄ちゃんの知恵だ」
「そうや。オー兄ちゃんに相談してみよう」
二人で兄ちゃんの部屋に行った。
私立中学に入るために夜も勉強をしていた兄ちゃんは、急な相談にも嫌な顔ひとつせず、親身になって聞いてくれた。
「そうか。幸が塾で辛そうな顔をしているとき、何か可哀そうやなと思ってたよ。よし、お父さんとお母さんに、『勉強苦手な子に進学塾の夏期講習は可哀そうや。お金の無駄使いや。今の幸には、家でゆっくりさせる方が、やる気が出るかもしれんよ』って、ビシッと言ってやるよ！　・・と、言いたいところなんやけどね、そんなん言えると思うか？『勉強ができんから、塾に行かせてやってるんやないか！　あんたは、自分のことだけ考えとき！』そう言われるに決まってる」

ぼくたちが、がっかりしていると、
「こんな時に頼りになるのは、だ〜れだ？」
と、兄ちゃんはニッコリと聞いてきた。
「・・？　・・上西郷のじいちゃん？」
賢と二人、同時に答えた。
「そう。当たり〜。明日、じいちゃんに電話して、うまいこと頼んどくから、幸も賢もなんも心配せんでいい。その代わり、明日一日だけは、塾と学童で、頑張ってくれるか」
兄ちゃんは、両手でぼくたちの肩をポンとたたくと、また机に向かった。
二日後、じいちゃんが車で迎えに来た。
じいちゃんは、お父さんの父親で、ぼくの家から車で一時間ぐらいの、西郷川の上流の上西郷という所に住んでいる。
じいちゃんは、六十歳までは、ぼくの家の近くに住んでいたんだけど、郵便局を定年で辞めたとき、ばあちゃんと二人で里山の古い民家に移住して、野菜や果物を作りながら、田舎の老後の生活を楽しんでいた。
五年ぐらいそんな生活が続いていたけど、三年前の寒い日に、急に、ばあちゃんが亡く

なった。心筋梗塞だった。

お父さんとお母さんに、採れたての夏野菜をたくさん持ってきたじいちゃんは、

「一人暮らしで寂しくてしょうがないんや、賢と幸をひと夏だけ預からせてくれないか」

と、懸命に頼んでくれた。おかげで、お父さんもお母さんも、ぼくたちが、ひと夏じいちゃんと過ごすことを快く許してくれた。

「自分のことは自分でして、じいちゃんに迷惑をかけない」「宿題を完全に終わらせる」

この二つの約束を守ることが上西郷行きの条件だった。

暗黒の世界から希望の夏休みへと明りをともしてくれた恩人のじいちゃんに迷惑をかけるなど、ぼくには考えられないことだった。

じいちゃんは、車の運転をしながら、

「お父さんはな、本当は優しいんや。でもな、子どもの頃からずっと優秀で、第一志望の銀行にもすぐ入れて、勉強のできん子の気持ちなんてよう分らんのや。許してやってな」

と、言った。

ぼくは、兄ちゃんも勉強がよくできて、ずっと優等生だけど、ぼくの気持ちを分かってくれるよと、心の中でつぶやいた。

じいちゃんの家に着くとすぐに、山の湧き水を引いて冷やした朝採りのクリームスイカをお腹いっぱい食べた。

それから、カジカガエルの鳴く清流で思いっきり水遊びをした。

ぼくたちが遊んでいる間、じいちゃんは、細長い竹かごを川の隅の石の間に置いて、

「明日の朝、このかごにウナギが入っとったら、明日の晩飯は、ウナギのかば焼きやぞ」

と、言った。

その日の夕飯は、裏の畑の野菜を使った特製夏野菜カレーだった。あまりの美味しさに、ぼくは、二杯目も大盛にしてもらった。

夜は、じいちゃんが造った外風呂に入った。満天の星を見ながら、三人で湯船につかっていたら、賢が、

「星がこんなにきれいだって知らんかった」

と、言った。

風呂上り、ぼくたちが花火をしている縁側で、じいちゃんは冷えたビールをうまそうに飲んでいた。

次の日の朝、六時に起きると、それぞれの仕事があった。家の裏の畑からトマトとナス

とキュウリを採ってくるのがぼくの役目で、賢は鶏小屋から烏骨鶏の卵を集めるのが仕事だった。その間、じいちゃんは、ご飯を炊いて、みそ汁を作ってくれていた。

ひと働きのあとの、烏骨鶏の卵かけご飯は、たまらなくおいしかった。揚げたナスと豆腐の味噌汁に、オクラ納豆とキュウリの粕漬で、おかわりした大盛ご飯もあっという間になくなった。最後は、採れたてのトマトに軽く塩を振ってまるかじり。昨日のパンと目玉焼きとバナナミルクの朝食よりこっちがいい、と思った。

洗濯物を干して、割り当ての玄関と廊下の掃除を終わらせてから、宿題を頑張った。

じいちゃんは、ぼくに付きっ切りで、優しく教えてくれた。

賢は、一時間もかからないでその日の分を終わらせたが、ぼくは三時間もかかってしまった。

漢字帳に百字書くのが大変だった。マス目からはみ出して、字が躍ってしまう。

算数の計算ドリルの計算は何とか出来たが、文章問題の意味が分からなかった。じいちゃんは、ぼくがわからないことを悪く言ったり、苛立ったりせずに、ゆっくり問題を読んでくれて、絵や図を丁寧にかいて、問題の意味を分かりやすく説明してくれた。

勉強を頑張ったあと、冷やしそうめんを食べて、スイカを食べて、昼寝をした。

クマゼミの鳴き声で目を覚ますと、じいちゃんと賢がいなかった。
じいちゃんの部屋に行くと、じいちゃんはパソコンで何か調べていた。賢は、じいちゃんのパソコンをのぞいていた。ぼくが、
「じいちゃん、何を調べてるの？」
と聞くと、じいちゃんは何も答えなかったが、賢がその画面のカタカナの文字を読んだ。
「うーん、ディス・・レク・・シア・・」
パタンとパソコンを閉じたじいちゃんは、「そうだ、ウナギが入っとるか見に行こう」と、立ち上がった。
ウナギは、二匹も入っていた。その竹かごを川につけたまま、ぼくと賢は、また水遊びに夢中になった。じいちゃんは、釣り糸の先に毛バリのついた釣竿で魚を釣っていた。
夕食は、ウナギのかば焼きだった。
満天の星を見上げながら、また三人で外風呂に入った。
風呂の中で、じいちゃんは、子どもの頃の話をしてくれた。
テレビの放送が始まった頃、子どもたちは、テレビの少年ヒーローの真似をして遊んだこと。中でも、「ウーヤーター」という掛け声で地面を揺らすことのできるヒーローや

「時間よ、止まれ」と言って、時間を止めることのできるヒーローは人気があったこと。

じいちゃんの話は、続いた。

「じいちゃんとばあちゃんが、小学校の同級生だったことは、知っとるやろ。八年前、二人が六十歳の時、小学校の同窓会があった。一人一人にマイクが回ってきて、じいちゃんにも回ってきた。その時、今までの人生を手短に話して、最後に、『ウーヤーター』と言うてみたんや。そうしたら、どうなったと思う？　みんな、全員がやぞ、グラグラと揺れてくれたんや。次に、『時間よ～、止まれ！』と言うてみた。そうしたら、全員がこれまた、ピタっと静止してくれた。時間が止まったんや。そのあと、『時間よ～、動け』で動き出したら、みんなもう大笑い。笑いながら泣いとるもんもおった。じいちゃんは、その時、このまま時間が止まってくれたら、いいのになぁと思うたよ。ふと見ると、ばあちゃんも、大笑いしながらハンカチで涙をふいとった」

そう言って、じいちゃんは、お湯でバシャバシャと顔を洗った。

夜、畳に布団を敷いて、三人で寝ていたら、網戸の窓から、丸い月がくっきりと見えた。

「じいちゃん、山は、月が明るいね」

と、賢が言った。じいちゃんは、

「明るい月と太陽が合体したらどうなる？」
と、聞いた。ぼくは、
「もっと、明るくなる」
と、答えた。
「その通り。幸は、賢いのう」
と言って、じいちゃんは、ぼくの右手を握った。そして、ぼくの手の平に指で「日」と書いた。文字が手から体にスッと入った。
「これが、お日様、太陽の『日』」
次に、また手の平に「月」と書いた。
「これが、『月』。『日』と『月』で、もっと明るくなるので、二つの字を合わせると、『明るい』という字になる。幸は、ようわかっとるのう。幸は、頭が悪いんじゃないんぞ。幸は、成績が悪いだけなんや。なーんも、心配せんでいいぞ。アインシュタインという偉い科学者も、九歳まで本が読めんかったらしいぞ。幸もいつかすらすら読めるようになる。なぁんも心配せんでええ」
ぼくは、心に灯が点ったような気がした。

昨日
幸

「頭がいい者と心がいい者と、どっちがいいと思う？」
じいちゃんは、さらに聞いてきた。
「どっちかって言われたら・・心だよね」
「うん。やっぱり、幸は賢いのう。いくら頭がよくても、原爆やら水爆やら人殺しの兵器を造る学者になったら何もならんもんな。大事なのは、人の幸せを思う優しい心なんや。賢い孫をもって、じいちゃんは幸せや」
ぼくも、何か幸せな気分に包まれていた。
次の日、手の平の感覚を思い出して「明るい」と書いた。その字を褒めてくれたじいちゃんは、ぼくの手の平に「辛」と書いて、
「これは、辛抱するの辛や。辛いとも読む。この辛の頭の縦棒にもう一本横棒を足すと幸福の幸の字、幸の名前の字になるんや。辛いことでも辛抱して、頑張って、もう一本プラスすると幸せになるっちゅうことや」
と、言った。そして、ぼくの手の平に「幸」と書いた。ぼくは、すぐに、紙に大きく「幸」と書いてみた。ぼくが、
「『幸』って、逆さまにしても『幸』だね」

と、言ったら、じいちゃんは、

「お前は、天才じゃのう。そうさな、幸せな人は、逆立ちしても幸せなんやな。向き合っている先の相手の人も幸せにするってことかもな。まいったのう。幸に、教えられたぞ」と言って、うれしそうに笑った。

ツクツクボウシが鳴き始めて、楽しい楽しい夏休みが終わろうとしていた頃、まだ残っている宿題が一つだけあった。「夏休みの思い出」の作文だ。

作文用紙を前に、じいちゃんは言った。

「幸は、字を書くのが苦手なだけやから、頭の中の作文はできるはずや。じいちゃんが、口述筆記してやる。それならきっと書ける」

「口述筆記？」

「幸が、この夏、心に残っていることを自由にしゃべったらええ。それを、じいちゃんがパソコンで文字にしてやる。幸の話は面白いから、きっといい作文になる」

ぼくは、川での水遊びや早朝のカブトムシ採りやお風呂のことや畑仕事や、「明るい」や「幸せ」の字のことや、じいちゃんとの生活で心に残ったことを次から次にしゃべった。じいちゃんが、フンフンとうなずきながら指を動かすと、文字が次々に出てきた。

「よしできた。最後に、口述筆記、祖父藤井直正と書いておくぞ。先生が何でパソコン？と思われたらいかんのでな。別に手紙も添えておこう。電話番号も書いとくぞ。作文と手紙を茶封筒に入れておくから、宿題と一緒に先生に渡すといい」

じいちゃんのおかげで宿題は終わった。

新学期、教室に入ると新しい先生がいた。前の先生の産休代替で、春に大学を出たばかりの青木瞳先生だ。学校には、男の青木先生もいたから、下の名前で呼ぶことになった。

その瞳先生にじいちゃんとの思い出がいっぱい詰まった宿題と茶封筒を渡した。

次の日の昼休み、瞳先生に呼ばれた。

「幸君、夏休みの宿題頑張ったね。昨日、おじいちゃんのお手紙を読んで、すぐに電話したのよ」

「えっ」

「幸は、読み書きは苦手だけど、頭はいいんですって、おっしゃってたわ。先生、幸君が勉強を好きになるように一生懸命頑張るからね。一緒に頑張ろうね」

「はい。よろしくお願いします」

ぼくは、涙が出るほど嬉しかった。
数日後の夜、瞳先生は家に来てくれた。
「ディスレクシア・・ですか・・」
お父さんは、先生の言葉を繰り返した。
「きちんと調べてみないと断定はできないんですが、恐らくそうだと思います。字という記号と音である言葉が結びつきにくいことが原因で読み書きが困難になる学習障害のことです」
「気が付きませんでした」
お母さんが、下を向いて唇をかみしめた。
「心配なさらないでください。適切な支援によって困難な状況は軽減しますから。エジソンやアインシュタインもディスレクシアだったそうですよ。早く気が付いてよかったです」
「幸に申し訳ないことをしました。もっと親身に関わってやっていたら、もっと早くわかっていたでしょうに・・」
お父さんが、悔しそうにそう言うと、

「初めてお父さんになられて、三人のお子さんを育てられて、とてもお忙しい毎日だったんですもの。それに、大学で教育学部にでも入らない限り気付けないことかも知れませんわ。とに角、気付けたことを喜びましょう」

お父さんもお母さんも深々と頭を下げた。

その後、お母さんは、仕事を家でのデスクワークに変えて、ぼくと学童を辞めた賢の宿題を丁寧に見てくれるようになった。

学校では、ぼくのために特別な先生が来るようになって、様々な方法で教えてくれた。

テストは、問題文を読んでくれるボランティアの人と空き教室で、ゆっくり受けられるので、間違うことも少なくなった。

帰りの挨拶をして教室を出るとき、瞳先生はみんなと握手するんだけど、ぼくだけには、握手の後、手の平にその日習った漢字を指でゆっくり書いてくれた。ぼくは、目を閉じて、手の平で字を感じる。すると、じいちゃんの「明るい」の時みたいに、体の中に漢字がすっと入っていく。

先生に「時間よ、止まれ」の話をした。

先生は、授業中にそれを活用してくれた。先生の「時間よ、とまれ」で全員が静止す

ると、先生は集中してない子を瞬時に見つけて注意する。注意されて、みんな笑顔になって、またいっそう集中して頑張った。

そんな楽しい楽しい四年生が終わって、ぼくの成績はずいぶんよくなった。まだ、本をスラスラ読めるわけではないけど、勉強が好きになったし、学校を休みたいと思うこともなくなった。

五年生になっても、絶対に瞳先生のクラスになりたい。そう思っていた四月一日、

「幸、瞳先生、学校変わるぞ」

と、お父さんが言った。

四月七日の早朝、ぼくは港の渡船ターミナルに来ていた。瞳先生が、大島小学校の赴任式に間に合うには朝七時の船に乗るはずだと、じいちゃんが渡船場まで送ってくれたのだ。

七時前にスーツ姿の瞳先生が現れた。

先生は、ぼくを見ると大きく手を振ってくれた。

ぼくは、駆け寄って花束と手紙を渡して、

「先生のおかげで勉強が好きになりました」

と、言った。
先生は、会釈をしていたじいちゃんに笑顔で挨拶をして、ぼくにはっきり、
「あなたが勉強を好きになったのは、あなたのおじいちゃんの真心のおかげよ」
と、言った。それから、ぼくの手を取って、
「四年生で習った一番大事な漢字です」
と、手の平に「愛」と書いてくれた。
「愛は真ん中に心。真心よ。真心を大切にして、誰かを幸せにしてね。その誰かの幸せが幸君をもっともっと幸せにしてくれるわ」
瞳先生は、ぼくの手をぎゅっと握った。
汽笛が鳴って、船のエンジンがかかった。
ぼくは、心の中で、
「神様、時間を止めてください」
と、言っていた。

青い色の鼻

渡邊　誠二

新学期になり、小学三年生になったリュウ君（高尾龍）の隣りの席は、転校生のエミさんでした。

母親と二人で暮らしていたエミさんは、母親が病気で亡くなり、リュウ君の町に住んでいる親戚の家に移ってきたのでした。

エミさんは、髪をうしろに輪ゴムで束ね、着ているのはいつも体操服でした。

エミさんは体が弱く、跳んだり走ったりはできませんでしたので、体育の授業の時は、運動場や体育館の隅っこに座って見学していました。

休み時間も、誰かと楽しく話したり遊んだりはしていませんでした。転校生なので、なかなか友だちができないのだろうとリュウ君は思いました。

夕ご飯の時、リュウ君は、エミさんのことを両親に話しました。

「リュウが友だちになればいい」とお父さんが言いました。
「そうよ、隣りの席なんだから」とお母さんが言いました。

その日は、掃除当番の日でした。掃除当番は席が隣り同士の二人ずつで行い、毎日席順に交代するのでした。

リュウ君は、普段よりずっと早めに学校に行き、窓開け、床の掃き掃除などの当番の仕事を、エミさんが教室に来る前に、全部終わらせました。

エミさんが教室に入ってきました。

リュウ君は言いました。

「おはよう。朝の掃除当番終わったよ」

エミさんの唇がかすかに動きましたが、声は聞こえませんでした。

エミさんは「ありがとう」と言ったのだと、リュウ君はわかりましたので、顔いっぱいの笑顔をつくりました。

エミさんも、笑顔をつくろうとしましたが、じょうずにできずに、口元がほんの少し緩んだだけでした。

下校時の掃除当番も、リュウ君が床掃除をして、エミさんは、窓の外に向かって黒板ふき叩きをしました。でも、エミさんの力が弱く、粉があまり飛びませんでしたので、代わってリュウ君が叩くと粉がぶわっぶわっと出ました。エミさんが少し笑顔になりました。

エミさんは、勉強がよくできました。リュウ君は、わからないところをエミさんに教えてもらいました。エミさんは、いつも小さな声でしたが、ちゃんと丁寧に教えてくれました。前の席の、コウ君とキクさんも、わからないところをエミさんに聞くようになり、友だちになりました。

エミさんの声と笑顔が少しずつ大きくなっていきました。

図画の授業で、隣り同士で似顔絵を描くことになりました。お互いに交代しながら顔を見せ合って描きましたが、リュウ君は恥ずかしくて、顔をエミさんにじっと向けていることができませんでした。それでも、ちらっ、ちらっとエミさんの方へ顔を向け、ひょっとこ顔をしたり、べろべろべぇーをしたりしました。

エミさんは、真剣な顔をして、鉛筆だけでリュウ君の顔を描いていました。クレパスを

持っていなかったのです。
リュウ君は、自分のクレパスの箱をエミさんの前に動かして言いました。
「これ使っていいよ」
エミさんは、クレパスを使おうとしませんでした。
リュウ君は、全部のクレパスをポキポキと半分に折り、箱のふたに入れ、エミさんの前に置きました。
「半分っこにしたから、遠慮しないで使ってよ」
エミさんは、半分に折られたクレパスをじっと見つめて、やっと一本のクレパスを手に取りました。
それは、青い色のクレパスでした。

みんなが描いた似顔絵は、教室の後ろの壁に貼られました。
みんな驚きました。エミさんが描いたリュウ君の顔は、たいへんじょうずに描かれていました。
そして、みんながさらに驚いたことは、鉛筆だけで描かれた顔に、鼻の筋だけが青い色

のクレパスで太く真っ直ぐに塗られていたのでした。
先生も目をまん丸にして驚いていました。
その絵は、学校を代表して、県のコンクールに応募され、一等賞を取り、さらに、全国のコンクールへ進み、そこでも最優秀賞を取りました。
日曜日、青い色の鼻の絵のことが新聞に載りました。絵といっしょにエミさんの顔写真も載りました。
記事には、モデルとなったリュウ君も紹介されていました。
リュウ君の両親は、たいへん喜んで言いました。
「リュウ、すごいじゃないか」
リュウ君は、何もすごいことをしたわけではありませんでしたので、なんとなく奇妙な感じでしたが、エミさんのことを思うとうれしい気持ちになりました。
「エミさん、喜んでいるだろうなぁ。明日は学校で大騒ぎだろう。エミさん、きっと笑顔いっぱいになるだろうなぁ」
翌日の月曜日、エミさんは学校に来ませんでした。

エミさんは突然、お別れの挨拶もないまま、又、どこかへ転校してしまったのでした。
エミさんは、親戚の家から遠く離れた町の施設へ移ったということでした。
リュウ君の隣りの席は、からっぽの席になりました。

それから二十年が経ちました。
リュウ君は、家業の自動車修理工場で働いています。
ある日の夕ご飯の時でした。居間に食卓テーブルがあり、仕事を終えたリュウ君が油まみれの作業着のまま椅子に座ろうとするので、お母さんが注意しました。
「ちゃんと着替えなさい」
「じゃあ先にシャワー浴びる」と言って、リュウ君は風呂場に向かいました。
しばらくして、お母さんが風呂場のドアをどんどんと叩いて「たいへん、たいへん」と叫びました。リュウ君は「何事なんだ」と大あわてで、風呂から上がり居間へ戻りました。
お父さんとお母さんは、食事を中断して、テレビのニュースを見ていました。
アナウンサーが伝えていました。
「日本人でイタリア在住の五嶋絵美さんが、世界で最も有名な絵画展のひとつである〝イ

タリア賞〟で第一位の大賞を受賞しました」
テレビ画面に、五嶋絵美さんの顔写真が映し出されていました。
お母さんが興奮して言いました。
「ほら、ほら、この人、あの、エミさんじゃないの、大人になったからちょっとわからないけど、似ているでしょ」
お父さんが、口についていたビールの泡を飛ばしながら言いました。
「そうだ、きっとエミさんだ。名前がいっしょなんだから。エミさんの苗字なんだったかなぁ？　リュウ、あの新聞記事持って来い」
リュウ君は急いで階段を駆け上がり、自分の部屋の押し入れの中からアルバムを探し出して、〝青い色の鼻一等賞〟の新聞記事の切り抜きを見つけました。エミさんの名前は、五嶋絵美さんでした。
記事を見て名前を確認したお父さんは、叫ぶような声で言いました。
「やっぱりだ。間違いないぞ、あのエミさんだ」
リュウ君は、似顔絵を描いたあの日の、エミさんの真剣な顔ときらきらした瞳を思い出していました。

アナウンサーの横に、緊急特別出演となって座っていた、髪の毛がボサボサで、あごひげを生やした老画家が、がらがら声で話しました。

「これは、すごいことですぞ。世界でも一番のコンテストだからのう。自慢じゃないが、この私は一位どころか、入選したこともない」

ニュースの中で、いつも偉そうに解説するスーツ姿の人が、五嶋絵美さんのことを紹介しましたが、突然のことなので、準備ができていなかったのでしょう、あまり自信なさそうに解説しました。

「えぇーとですね、五嶋絵美さんは、奨学金を得ながら、絵画の勉強をするために、イタリアに留学していたようでして、それまでの経歴はまだよくわかっていません。それよりもなによりも、このイタリア賞というのは、二年に一度開催され、世界で最も価値のある絵画コンクールなんです、大賞受賞は、日本人ではたぶん初めてのすごい快挙なんだと思います……」

老画家が、又言いました。

「そうじゃ、日本人では初めてなんじゃ。私は入選すらしたこともない」

「はい……、それは先ほどお聞きしました」とアナウンサーは少し困ったような、笑いた

いような顔で言いました。

その日の夜、テレビ各局は、エミさんのニュースを繰り返し伝え、エミさんの顔と受賞作品《手を伸ばして》を紹介していました。

《手を伸ばして》は、幾重も重なった柔らかい布を纏った女性が、背伸びをするように、天に向かって、両手をいっぱいに伸ばしている姿を描いていました。

女性の足首には鉄の鎖が繋がれていました。

一躍有名になりました五嶋絵美さんの絵画展が、世界中で開催され、大評判となり、日本の東京でも開催されることになりました。

しばらくして一通の封筒がリュウ君宛に届きました。

封筒の中には、東京で開催される《五嶋絵美イタリア賞大賞受賞記念絵画展》への特別招待状に加えて、旅行社の紹介状が入っていました。招待状は印刷された物でしたが、手書きで「出来ましたら、最終日にご来場くだされば幸いです。五嶋絵美も美術館に来館します」と、主催からの添え書きがありました。

リュウ君は、最終日に行くことに決め、旅行社に電話をしました。旅行社が飛行機と宿泊の手配をしてくれ、数日後に飛行機のチケットとホテルの案内状が届きました。

リュウ君は、エミさんに会えるのが待ち遠しくて、絵画展までの日数を何度も数え、車の修理中もずっと鼻歌を歌っていました。

新しいスーツを作り、新しい革靴も買いました。

五嶋絵美さんの東京での絵画展まで、あと二週間ほどになった日のことでした。

〝五嶋絵美さん急逝〟のニュースが流れました。

「五嶋絵美さんは、日本での絵画展を楽しみにしながら、その準備に忙しくしていましたが、突然倒れ、病院に運ばれ、治療をしていましたが、入院して数日後に亡くなりました。五嶋絵美さんは、子どもの頃から心臓の病気を抱えていました」

東京での絵画展は、予定通りに開催されました。

リュウ君は悲しい気持ちのまま、絵画展に行きました。多くの人たちが観に来ていました。会場に入って、最初の展示作品は、大賞受賞の《手を伸ばして》でした。畳二枚ほどの

大きな絵でした。

足に鉄の鎖が繋がれ、両手を空に向かって伸ばしている女性は、エミさん自身を表現しているのだろうとリュウ君は思いました。

他の展示作品には、いろいろな仕事で懸命に働いている人たちの姿が、力強く、やさしく、哀しく、そして美しく描かれていました。

展示作品の最後は、リュウ君の似顔絵でした。絵の横に、エミさんの言葉が書かれたパネルがありました。

≪作品名　青い色の鼻≫

『これは、私の最初の作品です。私は、子どもの時に、父を亡くし、母も亡くし、その上に、体も弱く、生きていることさえ辛い日々を送っていました。

小学校三年生の時に転校した学校で、リュウ君（高尾龍さん）の隣の席になりました。

リュウ君は、いたずら好きでしたが、私には、一度もいたずらはしませんでした。リュウ君は元気いっぱいで、いつも大きな声で話をしていましたが、私には、いつもやさしい

声で話しかけてくれました。
授業で、隣り同士で似顔絵を描くことがありました。私はクレパスを持っていませんでしたので、鉛筆だけで描いていました。
リュウ君は、リュウ君のクレパス全部を半分に折り、箱に入れて、私にくれました。
私は、使うことをためらいましたが、ひとつのクレパスを箱から取り出し、一本の線をすぅーと描きました。
それが、この絵の鼻の青い色です。
この青い線を引いたその時に、私の心の中に、勇気と自信と希望が、そして生きる力が、湧き出てきました』

絵画展が終わってから、一週間ほど経った頃でした。ひとつの小包がリュウ君に届きました。送り主は「五嶋絵美」とありました。
イタリアから送られたものでした。
小包の中には、小さな木の箱と、メッセージがありました。
メッセージの日付は一か月ほど前で、入院先の病室で書かれたようでした。

―五嶋絵美さんからのメッセージ―

東京の展示会に、リュウ君が観に来てくれることをお祈りしながら、招待状をお送りしました。リュウ君に会いたかったのです。リュウ君に会ってお礼を言いたかったのです。

青い色のクレパスは、ずっと私の宝物で、私のお守りでした。

あの日、青い鼻のリュウ君の顔を描いた日、クレパスをいただいたことに、私は声を出してお礼を言うことができませんでした。

私の命は残りあとわずかでしょう。リュウ君に会うことは叶いません。私は、今、遠い国で声を出して言います。

「リュウ君、ありがとう」

木の小箱には、半分に折られた、青い色のクレパスが入っていました。

リュウ君の大粒の涙が、クレパスに落ちました。

H.

ボクのしあわせ

山口　智史

夏休みも最後の一日となった、八月三十一日の昼下がり。ボクは自分の部屋の勉強机にすわり、絵の宿題に頭を悩ませていた。

「困ったな…なにを描けばいいんだろう」

机の上には、一枚の白い画用紙が置かれている。明日から学校がはじまるというのに、紙にはまだなにも描いていない。すみっこに小さく「五年三組　鈴木哲人」と、自分の名前を記してあるだけだ。はっきり言ってボクは、絵を描くのを苦手にしている。だけど、描けない理由はそれだけじゃなかった。ボクがこの宿題にとりかかれないわけ。それは、担任の先生から出された、絵のテーマにあった。

『夏休みの間におきた、幸せな出来ごとを描きなさい』

ボクはため息をついて、まっ白な画用紙を見つめた。

「こんなテーマじゃ、なにも描けないよ…」

この夏をふり返っても、ボクには幸せと思える出来ごとがまるでなかった。毎日を、重苦しい不安の中ですごしていた。夏休みに入ってすぐ、お母さんに病気が見つかったからだ。

お母さんはもともと体育会系で、学生時代は山岳部に所属していたらしい。お父さんとは、そこで知り合ったんだとか。山に登る機会こそ減ったものの、今でもお母さんは、フルマラソンを走りきるほどの体力の持ち主だ。そんな元気いっぱいのお母さんなので、病気になるなんて考えてもみなかった。だから入院して手術をうけると聞いた時、ボクはとても動揺した。お母さんにたずねても「女性の病気。大したことないから、大丈夫」と言うだけで、くわしいことは教えてくれなかった。大したことないのに、手術なんてするのかな…心配はつきなかったけど、手術を終えた日、病院の先生が「無事に成功したから、安心しなさい」と、やさしく声をかけてくれた。そして今日、お母さんは退院となり、この家に帰ってくる。家族三人がいっしょに暮らすのは、二週間ぶりのことだ。ボクにとっては、ずいぶん長く感じられた二週間だった。

ふいに部屋のドアがノックされ、お父さんが顔をのぞかせた。

「哲人、今から母さんを病院まで迎えに行くけど、お前も来るか？」
お父さんの顔も、心なしかうれしそうに見える。ボクは椅子にすわったまま、小さく首をふった。
「ううん、家で待ってる。まだ終わってない宿題もあるし」
「そうか。じゃあ、父さんだけで行ってくる。退院の手続きもあるから、帰ってくるのは夕方の五時ごろになると思う」
そう言い残すと、お父さんは車を運転して病院へと向かった。壁のかけ時計を見上げると、午後の二時をさしている。お母さんが帰ってくるまでに、なんとか絵の宿題をすませたい。ボクは携帯をとり出すと、友だちに電話して聞いてみることにした。みんながどんな絵を描いたのか気になるし、ひょっとしたらみんなも、絵の宿題に手間取っているかもしれない。
最初に電話したのは、同じクラスで幼なじみの、石原海斗くんだった。海斗くんとは家も近く、幼稚園のころから仲のいい親友だ。
電話に出た海斗くんに、ボクは絵の宿題が出来ていないことを伝えた。
「哲くん、まだ描いてないんだ。新学期は明日だよ？　大丈夫？」

「なかなか描きたい絵が浮かばなくて…海斗くんは、どんな絵を描いたの？」
「ボクが描いたのは、となり町でおこなわれた、花火大会の絵さ。夜空に何百発もの花火がひろがって、まるで花が咲いたみたいにきれいだった。哲くんも、いっしょに来ればよかったのに」
となり町の花火大会は、ボクも毎年楽しみにしている夏のイベントだ。海斗くんから誘われていたけれど、お母さんのことが気がかりで、今年は花火を見る気になれなかった。海斗くんは花火の絵を、黒い画用紙に描いたらしい。きっと、いい絵に仕上がったにちがいない。
次に電話したのは、井上隼人くんだ。井上くんはスポーツ万能なうえに成績も優秀で、クラスのリーダー的存在だった。
「宿題の絵？　オレは地区の水泳大会で、表彰台にのぼった絵を描いたよ。首にメダルをかけて、笑顔で手をふっている絵。二着で準優勝だったから、ちょっと悔しかったけどな」
井上くんはサッカーもうまいけど、一番得意にしているのは水泳だ。準優勝でも、じゅうぶんすごいのに…負けず嫌いの井上くんらしい。首からメダルをかけた絵なんて、誇ら

しいだろうな。ボクには絶対縁がなさそうだ。

最後にもうひとり、ボクは立花涼介くんに電話をかけた。立花くんは毎年夏休みに海外へ行っていて、去年ボクは、シンガポール旅行のおみやげをもらった。

「今年はドバイに行ってきた。世界一高いタワーにものぼったよ。でも、一番すごかったのは『ドバイ・ファウンテン』と呼ばれる噴水ショーだった。それがすごく幻想的だったから、その時の絵を描いたんだ」

この夏、ボクはどこにも旅行に行かなかったので、立花くんの話がうらやましかった。ドバイか…日本からは、ずいぶん遠いんだろうな。ボクにはドバイという国が、どこにあるのかもよく分からない。

電話を終えて、ボクは少し落ちこんでしまった。ボクひとりだけ、置いてきぼりになったような気がした。花火大会に、表彰台に、ドバイ旅行。みんなちゃんと、この夏の幸せを見つけられたみたいだ。

そもそも「幸せ」ってどういう意味なんだろう。楽しいこと？　うれしいこと？　それが分からないと、絵にすることなんか出来ない。

「大人の人は、どんな時に幸せを感じるのかな」

このまま考えこんでいても、なにも描けそうにない。ボクは気分転換をかねて家を出ると、近所の商店街に足をはこんだ。よくお母さんにおつかいを頼まれるため、商店街には顔見知りの人が多い。ボクはスーパーよりも、言葉を交わして買いものをする商店街の方が好きだった。

最初に立ち寄ったのは「夢屋」という、手づくりの小さなパン屋さんだった。ボクは大のパン好きなので、店のおばさんとはすっかり顔なじみだ。

「あらぁ、哲くん。いらっしゃい」

「ちょっと聞きたいことがあるんだ。おばさんは、なにをしている時が幸せ？」

ボクの質問に、おばさんは驚いて目を丸くした。

「ずいぶん難しいことを聞くのね。そうねぇ、幸せといえば…この夏に初孫が生まれたんだけど、やっぱり可愛くてね。孫の顔を見ている時が、一番幸せな時間かしら」

赤ん坊を一度も見たことがないボクには、おばさんの気持ちはピンとこなかった。でもおばさんの表情を見ると、それがとても幸せな出来ごとだというのがよく分かる。

パン屋さんを出たボクは、向かいの自転車屋さん「ミライサイクル」に向かった。この店の店員さんは若いお兄さんで、ボクが乗っている自転車も、お兄さんのおすすめで買っ

たものだ。
ボクが幸せについてたずねると、お兄さんは「幸せかぁ」とつぶやき、腕組みをした。
「そうだなぁ。オレはバイクが趣味なので、仲間とツーリングしている時が幸せかな。山の峠を走っていると、風になった気分を味わえるんだ」
そう言ってお兄さんは、バイクの写真をボクに見せてくれた。確かにかっこいいけど、バイクなんて小学生のボクにはまだ早い。店に置いてある、自転車の方が魅力的だった。
ボクはもう一軒「うおまさ」という魚屋さんに寄ってみることにした。店主の源三おじさんとは家族ぐるみのつきあいで、ボクも小さなころから可愛がってもらっている。
ボクの質問に、おじさんは「オレの幸せだって？　変なこと聞くんだな」と、声をあげて笑った。
「この歳になると生きていくのに精いっぱいで、幸せを感じる余裕なんてねぇなぁ。まぁ強いて言えば、酒飲みながら野球中継見るくらいかな」
ボクも野球を見るのは好きだけど、お酒なんてもちろん飲まない。やっぱり子どもと大人では、幸せの感じ方がちがうみたいだ。お礼を言って帰ろうとした時、おじさんがボクを呼び止めた。

「ところで哲人、母ちゃんはいつ退院するんだ？」
「今日だよ。もうすぐ家に帰ってくる」
それを聞くなり、おじさんは大きな赤いタイを袋につつみ、ボクに手渡してくれた。
「持っていけ。退院祝いだ」
「いいの？　ありがとう」
「哲人、今日からまた、母ちゃんに甘えられるな」
ガッハッハと、おじさんがからかうように笑った。ボクは赤くなった顔を伏せながら店を出た。時計を見ると、午後の四時をまわっている。そろそろお母さんが帰ってくる時間だ。ボクはきりあげて、自宅に戻ることにした。あまり絵の参考にはならなかったけど、いろいろな話を聞けて楽しかった。幸せのかたちなんて人それぞれで、ひとつに決まってないのかもしれない。
おじさんにもらったタイを家の冷蔵庫にしまい、ふたたび机の画用紙に向き合う。それでも、いっこうに筆は進まなかった。正直言うと、お母さんの退院にそわそわして、絵の宿題どころじゃなくなっていた。
「やっぱり、描けそうにないや」

先生には怒られるだろうけど、素直に「描けませんでした」とあやまろう。いきさつを話したら、先生も許してくれるかもしれない。

そんなことを考えていた時だった。部屋の窓から、お父さんの車がガレージに入るのが見えた。お母さんを乗せて、病院から帰って来たんだ。ボクははじかれたように部屋を飛び出し、階段をかけおりていった。しばらく待っていると玄関のドアが開いて、荷物を持ったお父さんが入って来た。そしてお父さんの後ろには、退院したお母さんの姿があった。

病院には何度も見舞いに行ったけど、自宅でお母さんを見るのはひさしぶりだ。やっぱり入院前よりも、顔がほっそりしたように見える。ボクはこの二週間、ずっと言いたかった言葉をかけた。

「おかえり、お母さん」

「ただいま、哲人。お父さんの言うこと聞いて、いい子にしてた？」

そう言ってお母さんは、ボクの頭をポンポンたたいた。いつまでも子どもあつかいなんだから…でも思っていたより元気そうで、ボクはひとまず安心した。

「それにしても、ひどい散らかりようね」

家の中を見渡して、お母さんがあきれたようにつぶやいた。確かにお母さんが不在の間、掃除はまったくといっていいほどしていない。それどころか、ボクもお父さんも、掃除機の使い方すらよく分からなかった。結局この家は、お母さんがいないと何もはじまらないのだ。

台所の冷蔵庫を開けたお母さんは、中を見て「あら？」と声をもらした。

「哲人、このタイどうしたの？」

「うおまさの源三おじさんにもらったんだ。退院祝いなんだって」

「そうなの。源さんにお礼を言わなきゃね。あとでいただきましょう」

お母さんはそう言うと、さっそく台所に立って調理をはじめた。ボクはその背中に「お母さん」と声をかけた。退院の日が八月三十一日に決まってから、ボクには気になっていたことがある。

お母さんが手を止めて、ボクの方にふり返った。

「なに？」

「ううん…なんでもない」

「どうしたのよ、変な子ね」

ボクはなにも言えず、だまってうつむいた。本当のことを知る勇気がなかった。ただの取りこし苦労であれば、ボクの気も晴れるんだけど。

夕食の時間となり、食卓にはおじさんからもらったタイと、出前で頼んだお寿司が並んだ。お母さんの入院中は、お父さんとふたりきりのさびしい夕食だった。お母さんが戻って三人になると、会話もはずむし食欲も増すから不思議だ。

食事の最中、お母さんがボクを見て、申しわけなさそうに口を開いた。

「ごめんね、哲人。お母さんのせいで、今年の夏は旅行に行けなかったわね」

「いいよ、そんなこと。旅行なんていつでも行けるし」

それを聞いたお父さんが、コップにビールを注ぎながら続いた。

「秋になってすずしくなれば、三人で山へ行かないか？　哲人でも登れる山を見つけたんだ。もちろん、母さんの体調が戻っていればの話だけど」

「わたしなら平気よ。若いころ山岳部で鍛えた『山ガール』ですからね」

「ガール？　お母さん、もうとっくにガールじゃないよ」

ボクの言葉に、お母さんが口をとがらせた。

「『とっくに』は言いすぎでしょ。見た目は変わっても、心の中はガールのままなの」

「哲人、デリカシーのない男は、女の子にモテないぞ」
お父さんがそう言って、ボクをたしなめる。ふたりに怒られながらも、なぜかボクはなつかしい気持ちになった。こういうなんでもないやり取りをしていると、いつも通りの日常が戻ったんだと実感する。
食事が終わり、お父さんがトイレにたったのをきっかけに、ボクはさっき聞けなかったことを、お母さんに聞いてみようと思った。そうしないと、心の奥のモヤモヤを、これからも引きずってしまうような気がした。
「あの…お母さん」
「なに？　どうしたの？」
「ボクの新学期に合わせて、無理に退院したわけじゃないよね」
入院中、お母さんが「哲人の新学期までに退院したい」と言ったのを聞いていたからだ。お母さんは目を見開いて、ボクの顔を見た。
「あたり前でしょ。そんなわけないじゃない」
「それならいいんだけど。ずっと気になっていたから」
するとお母さんは笑みを浮かべ、小さなため息をこぼした。

「哲人は心配性ね…退院が今日に決まったのは偶然よ。わたしならもう大丈夫だから、安心して」

お母さんがそう言って、こくりとうなずいた。それを見てボクは、心からホッとした。胸をおおっていた重苦しい雲が消え、心の中に、きれいな青空が広がった気分だった。

その瞬間、ボクはすっかり忘れていた、絵の宿題のことを思い出した。

『夏休みの間におきた、幸せな出来ごとを描きなさい』

今なら、宿題の絵を描けるかもしれない。

「やり残した宿題やってくる」

ボクは立ち上がると、急いで自分の部屋へ向かった。机に腰をおろし、鉛筆で画用紙に下描きを描いていく。それが終わるとパレットに絵の具をしぼり、筆で色を塗っていった。あれだけ苦労していたのがウソのように、すらすらと筆が動いた。

一時間後、ボクはすべての色をぬり終えた。

「出来た…」

画用紙に描いたのは、お父さん、お母さん、ボクが、家で食卓を囲んでいる絵だった。食卓にはタイとお寿司が並び、まん中にお父さん、右側にボク、左側にお母さんが、笑顔

を浮かべてすわっている。出来あがった絵を眺めて、ボクは顔が赤くなった。なんて下手くそな絵なんだろう。いや、それよりも、これって家族三人がご飯を食べてるだけじゃないか。花火大会や、表彰台や、ドバイ旅行にくらべると、しょぼいにもほどがある。

「でも、いいか…」

少し恥ずかしいけど、しょうがない。家族が笑いながら、いっしょにご飯を食べる。これが今のボクがみちびき出した「幸せ」の答えなんだから。

ボクははにかんでうなずくと、描きあげた絵を丸め、壁にかけてあるランドセルに差しこんだ。

総　評

「子どもたちに聞かせたい創作童話」は、今年で第四十四回となりました。応募してくださった皆様はじめ関係者の御協力に深く感謝いたします。今回は、全国三十八都道府県から、第一部（保育園児・幼稚園児・小学校低学年児童向け）に九十八点、第二部（小学校中・高学年児童向け）に八十九点、総計百八十七点の応募がありました。

応募くださった作品は、夢や希望、家族愛、友情、努力や向上心、思いやり、幸福観、自然愛、食品ロス、環境保護、人権、生命等、様々なメッセージを感じ取ることができるものが多くありました。それらをテーマとして、物語がコミカルに、あるいは幻想的に、あるいは哀愁を帯びて描かれており、子どもたちが心豊かに育ってほしいという書き手の思いが伝わってきました。作品募集の趣旨に沿った力作が多数寄せられたことを大変嬉しく思います。

さて、本事業は、子どもたちに「聞かせたい」童話を募集しております。審査においては、このことを踏まえつつ、三つの観点（①子どもたちに夢を育み、美しい心を育てたいという願いにかなう作品　②正しく美しい言葉、読みやすい文章　③独自性（個性的で魅力ある作品））に照らして読ませていただきました。

子どもは、読み聞かせを通して吟味された言葉に触れ、言葉で物語ることの楽しさやすばらしさを体験することになります。その体験は、子どもの見方・考え方に影響し、言葉の力を信じる心を育て、やがて、自分自身を物語る言葉の力を獲得していくことにつながっていくと思うのです。そう考えると、今後、次のようなことにも留意して作品をつくっていただけたらと思います。

○　登場人物の人物像や場面の状況、心情の変化・高まりを、子どもが想像できるように書く。
・人物の年齢を物語の早い段階で明示する。
・読み聞かせの対象児童の年齢に合った言葉を使う。
・子どもになじみの薄い古い文体は避けるようにする。
・クライマックスにおける人物の心情を丁寧に描写する。
・人物同士の位置関係が分かるように（特にファンタジーの世界を描く場合）描写する。

○　物語の展開に違和感が生じないように書く。
・現実からファンタジーの世界への場面変化が、唐突な印象を与えないようにするために、伏線をきちんと書く。
・クライマックスまでの過程における人物の行動や他の人物との関係性に、一貫性や妥当性があるように過不足なく描写する。

○　題名は、読者が一読後に、「なるほど」と納得いくように工夫・吟味する。

入賞作品の選評

《第一部》

特選「あめのしずくのブレスレット」

○　水たまりでおぼれそうになっていたアリを助けたりりちゃん。お礼に願いを一つだけかなえてくれるという雨のしずくのブレスレットをもらいます。しかし、願いがかなえられたら、ブレスレットは、もとの雨つぶにもどってしまうというのです。りりちゃんは、ブレスレットがぴかぴか光ってあまりにきれいだったので、なくしたくないため、お願いごとはせずにおこうと思います。だから、友だちのさあちゃんが、キーホルダーを落して困っている時も、だいち君の子猫が高い木から降りられずにふるえているのに出会っても、そっと二人のそばを離れていきます。この場面は、低年齢の子どもの心情がよくあらわされていると思います。

○　しかし、家に帰って、弟のゆうまの苦しそうな様子を見ると、ブレスレットの願いのことなど忘れて「弟の熱が下がってほしい」と心から願います。りりちゃんの弟への純粋な愛が感じられるところです。そうであるからなおのこと、ゆうまの熱が下がった後のりりちゃんの「よかった」という思いをあと少し書いてほしい気がしました。さらりと書きすぎている気がします。

○　願いを一つだけかなえるという話は、童話ではよく書かれる内容ですが、この作品のいいところは、ブレスレットの一つの願いがかなった後、りりちゃんが友達のさあちゃんやだいち君のもとへ走って行って、助けてあげるというところです。この後半が、このお話をあたたかいものにしています。

○　しかし、りりちゃんの年齢が書かれていません。登場人物の年齢は、その行動や心情を読み取る上で、とても大切になります。登場人物の年齢は、できるだけ早い段階で明示することが大切なのです。また、少し推敲を重ねてほしい部分も発見されました。この年齢の子どもたちに分かりやすい言葉や表現になっているか、何回も読みなおして、吟味してみる

ことも大切なことだと思います。

入選「もりのフリーマーケット」

○　森のフリーマーケットで売られているものが、品物ではなく、買う者の持っていない能力を買って、しばらくの間経験するという発想がユニークでとてもおもしろいと思いました。それぞれの店が、店主の特徴をとらえて何を売るか決めているところや、お代がその動物の好むものを払うところなど低年齢の子どもたちにも分かりやすいと思いました。

　最後にうさぎの耳を買ったはるとが、そよ風に葉がかさりとゆれる音や小川に何かがポチャリと飛び込む音などを聞いて、かねて子どもたちが気づかない自然への注意も喚起されそうです。

○　次に内緒話が出て、マーケットの誰かがつぶやいている声へと移り、その内容は、はると自身に危険がせまっていることが分かるしかけになっています。子どもたちは、はるとがどのようににげるか、はらはらしながら読むにちがいありません。そして、うまく逃げおうせた時、胸をなでおろすことでしょう。子どもたちの読み物には、こうしたドキドキ、ハラハラした要素も必要だと思います。ページ数にまだ余裕があるので、もっと強調してよかったかもしれません。

○　しかし、この作品はおもしろさばかりでなく、ちょっと視点を変えて書くと、もっとメッセージ性のある作品にもなりそうな気がします。例えば、森の動物たちはなんの目的でこんなマーケットを開いているのか、はるとに出会った時、みけこに語らせることもできます。（例　動物たちがかかえる困り事とか、いだいている願いや夢を少しの間だけでもかなえて、一日を楽しくすごす日としてある）また、買い物をする時、会話を入れて目的を語らせるとか。（例　たぬきがとんびの羽を買いたい時―　自分は一度あの広い空を飛んでみたかった。それにいっぱい実をつけるどんぐりの木を人間たちが切ってしまって困っている。ぜひ空をとびながら、次のどんぐりの木を探したい。）等々、動物と人間との関係。動物たちの願いなど、子どもたちに考えさせることが出来るような気がします。蛇足ですが…。

入選「人魚姫の歌」

○　登場人物との出会いや触れ合いを通し、悩みながらも進んでいく主人公の成長を描いた作品。

大好きな歌をもっと好きにさせてくれたユキノ先生。歌うことに自信を失うきっかけにも、ハーモニーのすばらしさを教えてくれるきっかけにもなったアユミちゃん。「楽しいから好き」でいいという価値観に気づかせてくれたニーナ。いずれも、作品のコンセプトを作る登場人物像がしっかりしている。また、これらの登場人物と主人公の成長に関わる出来事が効果的に描かれているので、話の展開を楽しみながら、読み進めることができる。特に、タイトルにもなっている「人魚姫の歌」と関係するニーナの存在は、ファンタジーの要素もあり、魅力的である。

○　自分（リカ）と他者（アユミちゃん）を比較して自身を見つめるというのは、発達段階を考えたとき、第一部の読み手には少々難しいのではないかと思う。むしろ、小学校高学年の子どもたちに読んでほしい作品である。

入選「おじいさんのメガネやさん」

○　二人さみしく生活しているおじいさんとおばあさんと、動物たちとの交流を描いた作品。

動物であることを必死に隠そうとする動物たちの姿を、楽しそうに見守る二人。目が見えにくくなって困っている動物に、久しぶりにめがねを作ることにやりがいを感じる二人。一方、めがねを作ってもらい、無邪気に喜ぶ動物たち。病気になったおじいさんを心配する「めがねをかけた」動物たち。両者のやりとりから、他者と触れあって生きることの喜び、お互いに助け合い、お互いを大事に思うことのすばらしさを感じる作品である。

○　めがねやさんは、夫婦で営んでいること、童話の冒頭に「むらはずれの　めがねやさん」、終末に「どうぶつむらのめがねやさん」という表現があることから、タイトルを工夫すると、作品の良さがさらに伝わりやすくなると思う。

○登場する動物は全て男性で、めがねをかけた自分のことを「おとこまえ」と満足するが、男性だけに絞らない方が、作品

に広がりが生まれ、読み手としても楽しめると思う。

《 第二部 》

特選「車の中でピクニック」

○ お母さんとマホちゃん、二人だけの家族のほのぼのとした日常生活の様子や二人の生活を支えてきた愛着のある軽自動車への二人の思いが描かれた作品である。心内語が効果的に使用されており、生まれたときから一緒に過ごしてきた水色の軽自動車のバンを大切に思うマホちゃんの気持ちに共感しながら読み進めることができる。

○ ミニバンとの最後の思い出に、お母さんとマホちゃんは、ミズモト公園にピクニックに行く。おにぎりを食べている最中に雨が降り出し、公園にいた人が次々と帰り出す。しかし、車の中でピクニックを続ける親子の姿から、軽バンへの感謝の気持ちや別れの寂しさが伝わってくる。また、それに呼応するかのように聞こえる軽バンのクラクションの音からマホちゃんと軽バンとの心のつながりを感じることができる。

○ 学校に軽バンで送ってもらうマホちゃんだが、毎日お米を炊いたりハムサラダを作ったりしている。頑張って働いてくれているお母さんを、家族の一員として少しでも助けたいという優しさが伝わってくる。マホちゃんの年齢は書かれていないが、同年代であろう高学年の子供たちは、家族が支え合って生きていくために、自分に何ができるのかを考えることができる。

○ 登場人物の会話がテンポよく、頑張って動いている軽バンの音や美しい情景描写とともに、様子を思い浮かべながら気持ちよく読むことができる作品となっている。

入選「まごころのともしび」

○ 描写力が高く、風景や会話を交わしている状況、人の動き等について鮮明に想像することが出来る。また、ぼくが達成していく状況が感動的に表現されており、読者を引き込んでいく。

○ 豊富な会話表現がそれぞれの登場人物像を明確にし、作品全体に臨場感をもたらせている。また、家族のつながりが随所に感じられ、それぞれの思いが交錯しながら、ぼくが豊かに成長していく感じが心地よい。

○ 豊かな自然環境の中で体験する多くのことは、現代の子供たちにはやや遠く容易に想像することはできないかもしれないが、作品世界の中で鮮やかに表現され、そこに残しておくことは、共感することができる。

○ 題名に込められた作者の思いは、終末まで読み解くことで十分理解することができるが、対象年齢からするとやや作者の思いが一読しただけでは届けられないのかもしれない。

○ じいちゃんとの会話の中でぼくの成長が促されていくものの、もっとぼくの心の成長がより鮮明になるように表現していけばさらに良くなるのではないかと提言したい。

○ ぼくの今後の成長が予感され、読者の創造が大きく広がっていく感じがする。なお、じいちゃんの子供の頃の表現があったが、話の一貫性からすると関連性がある話題が良かったのではないかと感じた。

入選「青い色の鼻」

○ 本人にとっては何気ない行動が、人の一生に良くも悪くも大きな影響を与えることがある。リュウ君は、転校生で体の弱いエミさんとの交流を深めていく中で、図工の時間に自分のクレパスを二つに折って貸してあげる。そのクレパスで仕上げた作品「青い色の鼻」をきっかけに、自信や勇気をもったエミさんは、世界で最も価値ある絵画コンクールで大賞を受賞するまでに成長する。リュウ君に届いた絵画展への特別招待状やいつまでも大切に持っていたクレパスは、エミさん

のリュウ君に対する深い感謝の現れであろう。本作品を通して、友達との関係で悩むことの多い小学校高学年が、友達関係で大切なことを考えることができる。

○ 物語の終盤は、リュウ君が再会を楽しみにしていたエミさんの訃報、その後届いた小包の中の木の箱とメッセージなど構成が工夫されている。決してハッピーエンドではないが、読者の心に強い印象を与える結末になっている。

○ この童話のタイトル「青い色の鼻」は、読者の関心を引きつけ、いったいだれのどんな鼻なんだろうか、どんな物語なんだろうかと、想像を膨らませるものになっている。

○「跳んだり走ったりはできませんでしたので」「すごいことをしたわけではありませんでしたので」など、なじみの薄い文体が使用されていることにより、読み進めることに抵抗をもつ子供も少なくないのではではないかという印象が残った。

入選「ボクのしあわせ」

○ 構成力に優れており、文体によどみがなく、筆致も軽やかである。よって、児童文学として読みやすく読後の広がりも感じられ、実に爽やかな作品となっている。

○ ボクの心情が時間の経過にしたがって丹念に書かれている。また、その効果として読者がボクと容易く同一化することができ作中に入り込みやすい。

○ 日常生活の中に見方や考え方を少し変えることでそこに幸福が内在していることを感じさせてくれる。さらに、その幸福感は人によって様々であることも理解させてくれ、穏やかな気持ちになれる。

○ 描写力と心情構成力が鋭く、豊かに想像することができる。さらに、登場人物の性格や置かれている状況等も読み味わうことで把握することができる。なお、人物をどの程度説明するかは、議論の余地がある。

○ 多感期なボクの状況を表現したかったという思いがあるとは思うが、入院中の父親のことそして母親の入院中の心情もより記述があると、さらにボクの心情への共感性が高まるのではないかと提言したい。

○　近所の商店街という状況は現在の子供たちには想像が難しいこともあるのではないかと危惧する面もあるが、人と人との温かい心と心の交流という面から考えると忘れてはならないような懐かしい昭和の原風景のような感もする。

「第44回　子どもたちに聞かせたい創作童話」募集要項

子どもたちの夢をはぐくみ、美しい心を育てたいという願いのもと、「子どもたちに聞かせたい創作童話」を募集いたします。

1　応募資格　高校生以上（16歳以上）の方でアマチュアに限る

2　作品の種類　創作童話、体験談、地方に伝わる民話に題材を得た作品などの「子どもたちに聞かせたい話」

3　応募規定　☆　第１部　　保育園児、幼稚園児、小学校低学年向けの作品
400字詰め原稿用紙（縦書き）　10枚～15枚

☆　第２部　　小学校中、高学年向けの作品
400字詰め原稿用紙（縦書き）　15枚～20枚

☆　表紙は枚数に含めません。各ページにページ数を記入してください。

☆　原稿はＡ４判の400字詰め原稿用紙を使用し、右肩をとじてください。（ワープロ原稿も可）

☆　作品は自作未発表でほかの童話賞等へ応募中の作品でないものに限ります。（公募で入賞した作品等の内容を加筆、訂正した場合も応募できません。）

☆　応募は、各部につき一人一作品に限ります。文体は自由です。

☆　表紙に、第１部・第２部の別、作品の題名、住所（郵便番号も記入）、氏名（ペンネームの場合は本名も書き添えること）、性別、年齢、職業（学校名）、電話番号、お持ちの方はメールアドレスを記入してください。

☆　人名、地名等の固有名詞には読み仮名をつけてください。

☆　民話、伝説等を題材とした場合は、その出典を明示してください。

☆　応募作品は返却いたしません。

☆　応募作品の著作権は応募者に帰属。主催者は入賞作品を冊子にまとめる権利を有する他、ホームページ上で作品集を公開します。

☆　作品選考に関するお問い合わせには一切応じられません。

4　応募の締切　令和３年９月12日（月）　消印有効

5　選考委員　（50音順・敬称略）

有村　　恵　（鹿児島市小学校国語部会会長　鹿児島市立吉田小学校長）
上野　恵美　（鹿児島童話会理事　かごしま児童文学あしべ同人）
内村　英人　（鹿児島県小学校教育研究会国語部会会長　鹿児島市立喜入小学校長）
勝本　祥治　（鹿児島市立生見小学校長）
田之上由美　（鹿児島市立図書館図書係主幹）

6　入選者発表　令和４年11月下旬頃
かごしま近代文学館かごしまメルヘン館ホームページ上にて発表します。
結果通知は、入選者のみとさせていただきます。

7　表彰式　令和５年２月26日（日）

8　賞　☆　特選（各部１編）…賞状及び楯、賞金５万円
☆　入選（各部３編）…賞状及び楯、賞金３万円
☆　佳作（各部数編）…賞状

9　主催　鹿児島市、鹿児島市教育委員会、公益財団法人かごしま教育文化振興財団

応募状況

■応募総数

第１部	98 点
第２部	89 点
総　数	187 点

■年齢別応募状況

部門別	第１部	第２部	合計
16 ～ 19 歳		3	3
20 ～ 29 歳	1	4	5
30 ～ 39 歳	2	11	13
40 ～ 49 歳	13	26	39
50 ～ 59 歳	16	17	33
60 ～ 69 歳	29	23	52
70 ～ 79 歳	25	11	36
80 ～ 89 歳	2	4	6
90 歳～			
合計	88	99	187

■都道府県別応募状況

都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数	都道府県	応募数
北海道	6	神奈川県	9	大阪府	14	長崎県	3
青森県	1	新潟県	3	兵庫県	15	熊本県	1
岩手県	2	福井県	1	奈良県	3	宮崎県	4
宮城県	1	山梨県	3	和歌山県	1	鹿児島県	24
秋田県	1	長野県	4	岡山県	1	沖縄県	3
福島県	1	岐阜県	5	広島県	2		
茨城県	1	静岡県	2	山口県	7		
群馬県	3	愛知県	6	徳島県	1		
埼玉県	9	三重県	1	香川県	1		
千葉県	9	滋賀県	4	高知県	1		
東京都	24	京都府	5	福岡県	5		

選考委員

（五十音順）

有　村　恵　氏（鹿児島市小学校国語部会会長　鹿児島市立吉田小学校）
上　野　恵　美氏（鹿児島童話会理事　かごしま児童文学あしべ同人）
内　村　英　人氏（鹿児島県小学校教育研究会国語部会会長　鹿児島市喜入小学校）
勝　本　祥　治氏（鹿児島市立生見小学校）
田之上　由　美氏（鹿児島市立図書館図書係主幹）

表紙絵・さし絵

（五十音順）

上　村　比登美氏
黒　木　奈　央氏
中　間　有　紀氏
桝　本　容　好氏（鹿児島市芸術文化協会副会長）

「子どもたちに聞かせたい創作童話」
第 44 集

発　行　令和５年２月
編集者　鹿児島市
鹿児島市教育委員会
公益財団法人かごしま教育文化振興財団
鹿児島市城山町５番１号
TEL（099）226−7771
印刷所　㈱あすなろ印刷
鹿児島市城西2-2-36-205
TEL（099）214−3757